

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第8集

# 満願寺跡

平成 22～23 年度連源寺急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

静岡県埋蔵文化財センター



## 序

静岡県では、斜面地の崩落等から県民の生命と安全を守るため、県内各地において、急傾斜地崩壊対策事業を行っています。

今回、報告する満願寺跡は、伊豆の国市寺家に所在する守山の山麓に位置し、連源寺急傾斜地崩壊対策に伴って、（旧）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所によって平成22年度に発掘調査された遺跡です。

この地域は、城郭遺跡でもある守山を中心に、中世遺跡が集中して存在し、守山中世史跡群として著名であり、中世史研究のための重要な地区の一つとして知られています。

満願寺跡はこの守山中世史跡群の一角に位置し、遺跡の北には鎌倉北条氏の祈願寺である願成就院が存在するなど、中世の空気が体感出来るかの場所に立地しています。僅少な文献資料と地元の伝承にもとづき、旧来から中世寺院と考えられてきましたが、考古学調査のメスが入ることはなく、実態は不明なままでした。

近年、伊豆の国市（旧韁山町）教育委員会により、この守山中世史跡群の調査が進展し、多大な成果を上げております。満願寺跡におきましても、（旧）韁山町教育委員会により、昭和62年、63年、平成元年の各年度に調査が行われ、実態不明であった宗教遺跡としての本遺跡について、明らかにされつつある途上であるといえます。

今回の（旧）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による調査は、調査規模の点でささやかなものでしたが、本文で述べるとおり、新たな知見を加えた点もあり、本遺跡の実態解明の一助となると自負している次第です。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長  
勝田順也

## 例　　言

- 1 本書は静岡県伊豆の国市寺家字池島93-2外に所在する満願寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成22年度遠源寺急傾斜地崩壊対策(一般-その他)【交付金】事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課の指導のもと、財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度の整理、報告書作成作業は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 満願寺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。  
本調査　平成22年11月～平成23年1月　　調査対象面積142m<sup>2</sup>　実掘面積143.24m<sup>2</sup>  
資料整理・報告書作成　平成23年7月～平成24年2月
- 4 調査体制は以下のとおりである。  
財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
平成22年度(現地調査)  
所長兼常務理事 石田 彰 次長兼総務課長 松村 享 専門監兼事業係長 稲葉保幸  
総務係長 潤みやこ 調査課長 中鉢賢治 調査第一係長 勝又直人  
常勤嘱託員 中島金太郎

静岡県埋蔵文化財センター

平成23年度(資料整理、報告書作成)

所長 勝田順也	次長兼総務課長 八木利道	主幹兼事業係長 村松弘文
総務係長 潤みやこ	調査課長 中鉢賢治	調査第二係長 溝口彰啓
主任 木崎道昭		

- 5 本書の執筆は木崎道昭が行った。ただし、中島金太郎の作成した草稿を基にした部分がある。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 現地調査と整理作業で実施した委託事項および委託先は下記のとおりである。  
現地調査の表土除去・安全管理等 矢田工業株式会社  
現地調査の測量・航空写真撮影 (株)フジヤマ  
整理作業 株式会社パソナ
- 8 発掘調査と整理作業では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。  
池谷初恵、佐藤達雄、佐野五十三(五十音順・敬称略)。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 出土遺物は3桁の通し番号(=遺物番号)を付して取り上げた。報告書中の挿図、写真図版の番号とは同一でない。
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構1/20、土器・陶磁器・瓦・石製品1/3、鉄製品1/2を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術事務局監修1992)を使用した。
- 5 土層名は第4章第1節の土層断面図(第6・7図)に表示した名称を用いる。
- 6 第2章第2節の周辺遺跡分布図(第3図)は国土地理院発行1:25,000地形図「蓮山」を複写し加工、加筆した。
- 7 遺構番号については、伊豆の国市による本遺跡の調査報告に継続させること前提にした。既報告では、各調査次の次数を3桁目につけ、以下個別の番号を付している。例えば第2次調査の1号井戸跡の場合、S E201としている。今回報告する調査は、通算すると第4次調査(それに先立つ文化課の確認調査は今回の調査地点と重複する部分があるので次数としては省略)であるので、S F401等の番号を付した。
- 8 遺構記号については、以下のように表記した。  
土坑：S F、小穴：S P、不明遺構(石列)：S X
- 9 本文や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように略した箇所もある  
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研  
(各)県教育委員会→(各)県教委  
(各)市・町教育委員会→(各)市・町教委
- 10 引用・参考文献については巻末34ページにまとめて掲載した。註については各章の最後に記載している。
- 11 遺物写真図版(図版5～9)の個々の遺物に付けた番号は、遺物実測図(第16～21図)の番号と一致する。例えば、16-2であれば第16図の2ということを意味する。また、写真図版にのみ掲載し、実測図の無い遺物については①、②…という表記にした。

# 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第1節 今回の調査に至る経緯.....	1
第2節 確認調査について.....	1
第3節 本遺跡についての伝承と過去の調査について.....	2
第2章 周辺の環境	
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法.....	11
第2節 調査の経過.....	12
第4章 調査の成果	
第1節 各地区の成果と遺跡の層序.....	13
第2節 遺構.....	17
第3節 遺物.....	21
第5章 まとめ .....	33
引用・参考文献.....	34

写真図版

抄録

## 挿図目次

第1章	
第1図 確認調査テストピット配置図 .....	1
第2図 第1～4次調査の調査区の位置.....	3
第2章	
第3図 周辺遺跡分布図.....	6
第4図 守山中世史跡群の史跡と遺跡の位置 .....	9
第3章	
第5図 調査区設定図.....	11

#### 第4章

第6図	北区土層断面図	14
第7図	南区土層断面図	15
第8図	北・南区土層柱状図	16
第9図	遺構全体図	18
第10図	南区遺構全体図	19
第11図	小穴群平面図・断面図	20
第12図	土坑平面図・断面図	20
第13図	土坑出土遺物	20
第14図	石列平面図・断面図	20
第15図	出土遺物分布図	22
第16図	出土遺物(土器・陶磁器1)	24
第17図	出土遺物(土器・陶磁器2)	26
第18図	出土遺物(土器・陶磁器3)	27
第19図	出土遺物(瓦)	28
第20図	出土遺物(石製品)	28
第21図	出土遺物(金属製品)	29

## 挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	1	第3表	遺物観察表	31
第2表	遺構観察表(小穴)	17			

## 図版目次

図版1	1 守山全景(南東より)	6 五輪塔残欠出土状態(北区)
	2 北区完掘状況(南東より)	図版5 1 須恵器・かわらけ他(外面)
図版2	1 南区完掘状況(北東より)	2 須恵器・かわらけ他(内面)
	2 南区Ⅱ区完掘状況(北西より)	3 仏花瓶(外面)
図版3	1 南区I区完掘状況(南より)	4 仏花瓶(内面)
	2 北区③区完掘状況(北より)	5 常滑焼(外面)
	3 北区②～③区完掘状況(北東より)	6 常滑焼(内面)
	4 土坑(S F401)(北東より)	図版6 1 捣鉢(外面)
	5 石列(S X401)(南より)	2 捣鉢(内面)
	6 1号小穴(S P401)(北東より)	3 戦国～近世の陶器(外面)
図版4	1 2号小穴(S P402)(北東より)	4 戦国～近世の陶器(内面)
	2 3号小穴(S P403)(北東より)	5 近世の陶磁器(外面)
	3 4号小穴(S P404)(北東より)	6 近世の陶磁器(内面)
	4 5号小穴(S P405)(北東より)	図版7 1 近世の陶器(外面)
	5 6号小穴(S P406)(北東より)	2 近世の陶器(内面)

- |      |               |      |            |
|------|---------------|------|------------|
| 3    | 中世～近世の陶磁器(外面) | 6    | 近世の磁器(外面)  |
| 4    | 中世～近世の陶磁器(内面) | 7    | 近世の磁器(内面)  |
| 5    | 常滑焼(外面)       | 図版 9 |            |
| 6    | 常滑焼(内面)       | 1    | 古代～中世の瓦(表) |
| 図版 8 | 1 近世の陶器(小壺)   | 2    | 古代～中世の瓦(裏) |
|      | 2 近世の磁器(小壺)   | 3    | 五輪塔空風輪     |
|      | 3 近世の磁器(碗)    | 4    | 宝篋印塔相輪部    |
|      | 4 近世の磁器(外面)   | 5    | 金属製品       |
|      | 5 近世の磁器(内面)   |      |            |

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 今回の調査に至る経緯

静岡県では、山崩れや急傾斜地の崩落から県民の生命と安全を守るために、県内各地において、急傾斜地崩壊対策事業を行っている。

今回、報告する満願寺跡は、伊豆の国市(旧蘿山町)寺家地内にあって、守山東南麓に位置する。平成22年度連源寺急傾斜地崩壊対策事業に伴って、静岡県沼津土木事務所の委託により、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査を行った。

## 第2節 確認調査について

今回の本調査に先だって、静岡県教育委員会によって確認調査が行われているので、その概要について述べる(註1)。

県教委文化課(現文化財保護課)による確認調査は、本調査の前年度である平成21(2009)年12月4日に



第1図 確認調査テストピット配置図

実施された。工事施工範囲内に4カ所のテストピット(TP 1～4)を設定し、人力掘削を行った(第1回)。テストピットの大きさは不定形であるが、合計した掘削面積が10m<sup>2</sup>になるように設定した。TP 1・2では地表下約0.3～0.5mまでは表土であるが、その下に厚さ約10cmの中世の整地層と判断される層が検出された。TP 1では整地層の下部から加工痕を有する岩盤が検出され、石切場の可能性が想定された。TP 2では整地層の下は地山であった。

TP 3は地表下約0.4～0.5mまでは表土であり、その下は角礫が多く混ざる地山層であり、遺構、遺物ともに検出されなかった。TP 4では地表下約0.4mまでは表土であるが、地表下0.4～0.6mには極めて新しい盛土層があった。地表下0.6～0.8mは黒褐色粘土層が存在するが、この中から中世陶器が出土し、中世の遺物包含層と判断された。地表下0.8m以下はTP 1、2で検出されたとの同様な整地層と判断される層が検出された。

以上の点より、最も北側のTP 3を除く3カ所のテストピットで整地層が発見され、遺構がこの整地層の上で検出されると予想された。また、TP 4より中世包含層の存在も判明した。これらの成果に基づき、工事範囲のうちTP 3周辺を除く箇所で調査が必要であると判断されるに至った。

### 第3節 本遺跡についての伝承と過去の調査について

#### 1 満願寺についての伝承

本遺跡についての文献資料は極めて乏しく、以下に引用する『豆州志稿』及び『増訂豆州志稿』に記載された、伝承史料が存在するのみである(以下の引用では一部新字に改め、読み下し文にした箇所がある。また、読み易くするために空白を入れた箇所がある。〔 〕は報告者による)。

『豆州志稿』(註2)卷十

廢蓮華寺○廢滿願寺 俱二地名存ス

『豆州志稿』卷十二

○靜ノ墓 源公賴朝 伊東祐親ガ季女名ハ靜ト云ニ通ズ 祐親コレヲ知リ怒テ公ヲ殺サントス 公潛カ逃レ北條ニ至ル 靜シタフテ イタレトモ公ト相見ルコトヲ得ズ 即池ニ身ヲ投シテ死セリ 従婢六人亦皆從チテ池ニ没ス 村人憐シニ池ノ旁ニ葬リ 石塔七ツヲ立テリ 又追福ノ為満願寺ヲ建ツ 土人相傳ル說此ノ如シ ソノ池ヲ靜ノ池云 墓ヲ靜ノ墓ト云 近頃ソノ所ニ小祠ヲ造リ 七ノ宮又靜ノ宮ト稱ス 但賴朝及祐親カ女トスルハサダカナラズ(〔以下割注〕一説ニ祐親女ヲ取り返シ 江間小四郎ニ再嫁スト 日本史賴朝傳之ヲ用 一説ニ山木判官ニ嫁スト)

『増訂豆州志稿』(註3)卷之十下

廢滿願寺(中略)【増】伊豆名迹志ニ 源義經ノ妾靜ヲ開基トストアレドモ 詳ナラズ(又土人ノ傳說アレドモ附會ナル可シ[以下略])寺址ニ靜ノ靈堂存セシヨ 往年眞珠院境内ニ移ス

『増訂豆州志稿』卷之十二

○靜墓【増】中條村ノ西 滿願寺廢址ニアリシヨ 慶應三年同村眞珠院ニ移ス 此墓由來詳ナラズ ○土人傳云 源賴朝私ニ伊東祐親ガ季女静ト云ニ通ズ 祐親怒テ殺ントス 公逃レテ北條ニ至ル 静跡シテ相見ルヲ得ズ 乃池ニ投ズ 従婢六人亦投ズ 村人憐ミテ池傍ニ葬リ 石塔七ツ建テ追福ノ為満願寺ヲ建ツ 其池ヲ靜ノ池 其墓ヲ靜ノ墓ト云 近頃七小祠ヲ造リ靜ノ宮ト稱ス 但祐親ノ女トスルハ定カナラズ(一説ニ云 祐親其女ヲ江間小四郎ニ再嫁スト 大日本史賴朝傳之ヲ用 又一説ニ云山木判官ニ嫁スト)【増】土人ノ傳說恐ラクハ附會ナル可シ[以下略]

他に比較し得る史料も伝承も管見の限り存在しないため、確かめるべくもないのですが、江戸後期

～明治前期の現地の人々の伝承では、平安時代末に源頼朝(又は義経の妻の静)の事跡に基づいて建立されたとされる。なお、慶応三年まで、満願寺の痕跡を窺うものが存在し、そこには「静墓」と称する墓があり、また「静ノ宮」又は「七ノ宮」と称する七小祠があった(恐らく石塔も存在していたであろう)。そして、慶応三年に、「静墓」が同村の真珠院に移されたことが記載されている。満願寺自体は『豆州志稿』が書かれた段階(1800(寛政12)年)で既に廃寺になっていた。これらの史料で、江戸後期～明治前期の記述は事実と考えられる。また、頼朝や伊東祐親云々は別として、考古学的調査の成果から平安末～鎌倉時代に寺院(堂)として建立された可能性があると思われる。

## 2 本遺跡の過去の調査とその成果

本遺跡が、現在地において埋蔵文化財包蔵地として認識されたのは、必ずしも古いことではないと思われる。管見の限りでは、1977(昭和52)年から行われた旧葦山町の石造物調査で、地表から五輪塔の空風輪が発見され、『葦山町史』第四巻(1988年)に掲載されたのが本遺跡の文献上の考古学的所見の嚆矢と思われる。先述した史料の満願寺跡の所在地が、現在の箇所に比定された最も古い記述は、文献上では確かめ得なかったが、現代にまで伝わる伝承地だったためであろう。この『葦山町史』第四巻では、五輪塔の写真と実測図が掲載され、その形状から「鎌倉時代後期から室町時代初期にかけての製作と推定される」とし、「満願寺の草創は石造遺物からみても鎌倉時代にさかのほり得る」とする。



第2図 第1～4次調査の調査区の位置

満願寺跡についての、考古学的な発掘調査は、旧韮山村教育委員会により、1987(昭和62)年、88(昭和63)年、89(平成元)年度の三次に亘って行われた(第2図)。これが今回報告する調査以前に行われた本発掘調査の全てである(伊豆の国市教委 2009)。以下概略について述べてみたい。

1987年度の第1次調査では、1間×1間の掘立柱建物跡1基と小柱穴群が検出された。掘立柱建物跡の柱穴覆土から近世陶磁器が出土しているため、報告者は近世以降の建物としている。また、調査以前に表面採集されていた五輪塔の空風輪(町史掲載のものとは別)と、調査時に出土したかわらけが図示されている。

1988年度の第2次調査地点は、第1次調査地点の南側であり、今回報告する調査地点の東側隣接地である。本遺跡では最大の面積である492m<sup>2</sup>が調査され、多数の遺構・遺物が検出され大きな成果をもたらした。検出された遺構は、井戸跡6、溝状遺構9、土坑墓13、不明遺構21、段状遺構1である。不明遺構のうち4基は規則的に石を配する一體的な集石・石積み遺構であり、報告者は門あるいは道状遺構の可能性を想定している。また、井戸跡には12世紀末かそれ以前に構築されたとされるものが含まれている。

遺物としては、かわらけ、山茶碗、中世国産陶器(常滑、渥美、瀬戸美濃、志戸呂)、近世陶磁器、中世貿易陶磁(同安窯系、龍泉窯系他)、瓦、瓦質製品、錢貨(北宋錢、明錢他)、砥石、茶臼、羽釜、鍋、石塔(五輪塔、宝篋印塔)残欠、鉄釘、銅製中空玉、硯、軽石加工品、人骨、スラグ等で、中世～近世の各種の遺物があり、遺構内外から出土した。また、弥生時代末～古墳時代初頭の壺形土器の出土もあった。

以上の遺構・遺物から、報告者は「段状遺構・集石・石積み・併走する溝状遺構などにより平場を造成し、区画していることが想定される。その時期については、中世後半から近世にかけてと考えられる」としている。

1989年度の第3次調査地点は、第1次調査地点の北側であり、206m<sup>2</sup>が調査の対象となった。遺構としては、井戸跡1、溝状遺構3、土坑墓3、段状遺構1であり、第2次調査で検出された遺構と同種のものが検出されている。報告者はここでも第2次調査地点と同様に、溝状遺構と段状遺構により区画された空間を想定し、また、その方向等から共通する性格を看取している。遺物はやや量が少ないが、第2次調査と同様のものが出土している。

以上、過去の調査について概観したが、本遺跡で今回の調査以前に既に判明していたことは以下のようないることであった。  
①遺構の構築は12世紀末以前にはじまり、15世紀以降は区画され造成された平場の利用が行われ、近世まで継続する。  
②遺構・遺物の内容は守山中世遺跡群の諸遺跡のそれと大きくは相違しない。ただし、多数の土坑墓の検出や、五輪塔、宝篋印塔が出土しているなど、埋葬や仏教関連の遺構・遺物の存在が注意される。  
③満願寺に比定し得る、中世以降の寺院跡については、現状では存在を確定できない。

今回の調査は以上のような過去の調査成果をふまえた上で行われた。

## 註

- (1)確認調査の概報については、『静岡県文化財年報(平成21年度)』(静岡県教委 2011)に掲載されている。
- (2)秋山富南編。1800(寛政12)年に完成。ここでは静岡県立中央図書館蔵の写本復刻版(秋山 2003)を参照、引用した。
- (3)萩原正夫が『豆州志稿』に追記し、「増訂豆州志稿」として、1895(明治21)年に出版した。これにより『豆州志稿』が増訂版ながら、広く世に知られることになった。ここでは、戸羽山漸の修訂編纂のもの(戸羽山 1967)を参照、引用した。

## 第2章 周辺の環境

### 第1節 地理的環境

満願寺跡は、北伊豆の田方平野の南寄りに位置する。田方平野は伊豆半島北部第一の河川である狩野川による沖積平野であり、多くの氾濫原や自然堤防が存在する。

この田方平野に対して、静浦山地が西側から伸びているが、平野を北流する狩野川の浸食により、山地の東側先端部が切り離され、あたかも独立丘陵の様相を呈する山がある。今回調査した満願寺跡はこの独立した山の山麓直下に位置する。この山が歴史的に重要な「守山」である。守山は最高所が標高105メートルあり、周辺低地からの比高差は約90メートルである。遠方から見ると、あたかも平野に浮かんでいるような印象を受ける。満願寺跡はこの守山の南東麓の山麓直下の低地(自然堤防上)に所在する。微地形的には、周辺の低地より一段高いテラス状の平坦地である(第3～4図)(並山村史編纂委員会編 1995)(伊豆の国市教委 2009)。

### 第2節 歴史的環境

満願寺跡付近には縄文時代から近世・近代に至る多数の遺跡が存在し、重要遺跡も少なくない(第3図)。紙数の関係もあり、本節では今回の調査に関連した時代(中世～近世)にほぼ限定して記述する。

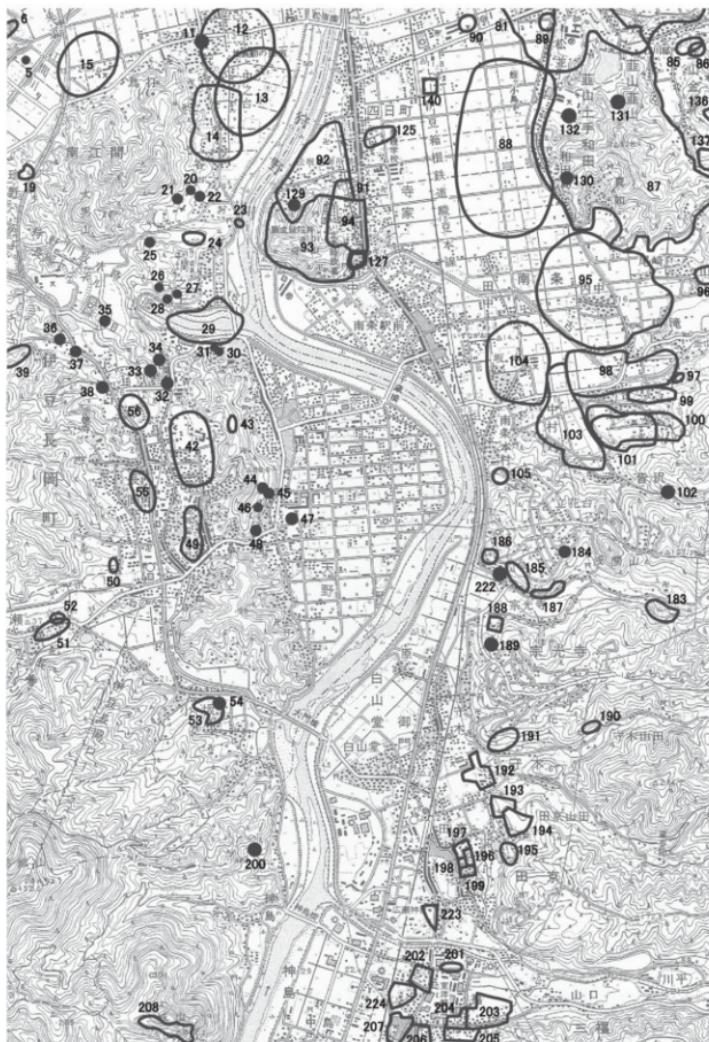
本遺跡の存在する守山地域は、中世遺跡が密集して存在し、「守山中世史跡群」と呼称されている。「守山中世史跡群」は、本遺跡を含む五つの遺跡と三つの史跡からなり、中世の下田街道が南北に走り、「中世を通じて歴史的・景観的なまとまりを有する」(池谷 2010)と評価されている(第4図)。本遺跡の北側に立地するのは、願成就院跡であり、守山の斜面を含み込んだ形で史跡指定部分を含み、本遺跡に隣接する。鎌倉北条氏創建の寺院として、又運慶作の仏像の存在で著名である。現在までに数次の発掘調査が行われているが、規模の小さい調査が多く、中世寺院についての考古学的な詳細については不明な点が多い(注1)。

願成就院の北には光熙寺跡が存在する。現寺院の改築に伴って調査が行われており、12世紀～近世の遺構(溝、井戸他)と遺物が出土しているが、中世寺院の存在を明示するものは発見されていない(伊豆の国市教委 2009)

守山の北には、広大な御所之内遺跡がある。御所之内遺跡は複合遺跡であり、北条氏邸跡(円成寺跡)、伝堀越御所跡が国史跡に指定されている。また、史跡指定外でも多くの遺構・遺物が発見されている。

北条氏邸跡は、「守山中世史跡群」の中では最大の面積の調査が行われ(第13次調査で2930m<sup>2</sup>)、平安末～鎌倉時代の北条氏邸が明確に検出された。その成果によれば、12世紀中頃の1a期から大形建物、堀、井戸で構成される屋敷地が形成され始める。屋敷地としての使用は13世紀中頃の3期で終了するが、12世紀末～13世紀前半の2期に建物数、規模ともピークを迎える。また、13世紀後半～14世紀初頭の第4期には、建物がなくなり土坑墓が見られるだけになる。遺物としては多量の貿易陶磁とかわらけの存在が注目される。

鎌倉幕府滅亡後、14代執権北条貞時の妻である円成により、北条氏一族の菩提を弔うために円成寺が建立される。これも先の北条氏邸とは同一地点から検出されている。池を伴う庭園や、灯明皿と思われるかわらけ、仏具等が発見されている。円成寺は遺物・遺構の上では14世紀中頃～後半にかけて衰退するが、14世紀末～15世紀前半は遺構・遺物量のピークを迎える。関東管領山内上杉氏の庇護を受け



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
5	大筋山横穴群	古墳	92	御所之内遺跡	弥生～近世
6	横根沢横穴群	古墳	93	守山古墳跡	中世
11	豆塙古墳	古墳	94	願成就院跡	奈良～近世
12	町屋遺跡	縄文～古墳	95	内中遺跡	縄文～古墳
13	窓の堀遺跡	古墳～平安	96	山田古墳群	古墳
14	吉祥寺廢寺	中世	97	宮ノ後遺跡	縄文～弥生
15	八ツ島遺跡	古墳・平安～中世	98	宮下遺跡	弥生～古墳
19	湯ヶ洞山遺跡	縄文～古墳	99	台古墳群 A	古墳
20	桜ヶ平 A 横穴群	古墳～奈良	100	台古墳群 B	古墳
21	桜ヶ平 B 横穴群	古墳～奈良	101	長者ヶ原遺跡	旧石器～古墳
22	釜石場遺跡	古墳	102	皆沼日向古墳	古墳
23	四反畠遺跡	奈良～中世	103	皆沼低地遺跡	弥生～古墳
24	御丈馬場遺跡	縄文	104	坂本遺跡	弥生～近世
25	男山横穴群	古墳～奈良	105	大間洞古墳群	古墳
26	入山横穴群	古墳～奈良	125	正念寺遺跡	弥生～中世
27	子之神横穴群	古墳～奈良	127	湧頭寺跡	弥生～近世
28	壇之上 A 横穴群	古墳～奈良	129	北条氏邸跡	古墳～近世
29	壇之上遺跡	弥生～古墳	130	和田遺跡	中世
30	鎌池横穴群	古墳～奈良	131	無量寺遺跡	中世
31	谷戸洞横穴群	古墳～奈良	132	芳池遺跡	弥生～古墳・中世
32	洞古墳	古墳	136	立本寺陣城	中世
33	牛ヶ洞窟跡	平安～中世	137	追越山陣城	中世
34	白坂山横穴	古墳～奈良	140	木戸福荷陣城	中世
35	上林地山横穴	古墳～奈良	183	門下遺跡	平安
36	花坂横穴	古墳～奈良	184	富士見夫婦塚古墳群	古墳
37	屋敷台家跡群	奈良～平安	185	横山段古墳群	古墳
38	竹ノ鼻横穴群	古墳～奈良	186	横山段遺跡	平安
39	花坂島橋古窯址	奈良～平安	187	宗光寺横穴群	古墳
42	田端古墳群	古墳	188	宗光寺廢寺址	奈良
43	強勒堂横穴群	古墳～奈良	189	神明理古墳	古墳
44	細洞横穴群	古墳～奈良	190	守木横穴群	古墳
45	万法院横穴群	古墳～奈良	191	平石古墳群	古墳
46	多門山横穴群	古墳～奈良	192	山崎遺跡	古墳～中世
47	若宮経塚	中世	193	山畠遺跡	縄文・古墳
48	岩鼻横穴群	古墳～奈良	194	躰原遺跡	縄文・古墳
49	高天ヶ原遺跡	縄文～古墳	195	向山遺跡	縄文・古墳
50	丸山古墳群	古墳	196	大庭遺跡	縄文・古墳
51	長瀬遺跡	縄文～古墳	197	公藏免遺跡	縄文～古墳
52	長瀬古墳群	縄文～古墳	198	殿坂遺跡	縄文
53	小坂遺跡	縄文・古墳	199	段遺跡	縄文～古墳
54	駒形古墳群	古墳	200	笠石山遺跡	古墳
55	別所遺跡	縄文～中世	201	満越遺跡	縄文～古墳
56	椎木遺跡	弥生～平安	202	横落遺跡	縄文
81	山木遺跡	古墳～近世	203	仲道 A 遺跡	旧石器～縄文 古墳～近世
85	山木下町遺跡	弥生～古墳	204	仲道 B 遺跡	縄文
86	山木館	中世	205	寺ノ下遺跡	縄文
87	並山城跡	弥生～中世	206	南原遺跡	縄文
88	蛭ヶ島（蛭ヶ小島）遺跡	弥生～古墳	207	京塚遺跡	古墳・平安
89	兵衛ノ森遺跡	弥生～古墳	208	金山城跡	中世
90	道下遺跡	平安～中世	222	横山段横穴群	古墳
91	光照寺	中世～近世	*番号は静岡県遺跡地図に準拠		

たことによるとされる。

北条氏邸の北東側に所在する伝堀越御所跡は史跡指定外の部分を含んで、室町時代の堀越公方の館跡とされている。広い面積を調査した地点がないため、細部については不明であるが、大規模な池やそれに伴う造水施設、多数見つかった溝、井戸、土坑墓等から、堀越御所の様相が推定復元されている。

なお、守山自体が「守山跡」として、全域が埋蔵文化財包蔵地になっている。狩野川に面した西側斜面部分で範囲確認のための調査が行われているが、城砦に関する情報は得られていない。

次に中世石造物とその所在地についても述べる。まず、本遺跡のすぐ北側に信光寺が存在する。武田信光開基と伝えるが詳細は不明である。願成就院と同種の瓦が出土するので、元は同寺の寺地だったと考えられる。ここには、五輪塔と宝鏡印塔の残欠が多数存在し、一部は満願寺跡から運び込まれたらしい。14世紀のものもあるが、多くは15世紀～16世紀に比定されている(葦山町史編纂委員会編 1988)。

守山南麓の真珠院は、尾根を隔てているが本遺跡から至近距離に所在する。第1章2節で述べたように、慶応3年に「静墓」が発掘され移された記録があり、それ以外のものも移された可能性が高い。ここには「定仙和尚塔」(正安4(1302年))が存在するほか、3基の建武二年(1335年)銘塔、守山の山肌に刻み込まれた磨崖仏(貞治2(1363年))が所在し、年代の判明する貴重な例となっている。このほかにも多数の五輪塔と宝鏡印塔の残欠が存在する。13世紀末に比定されるものが最も古く近世に至るものまであるが、14世紀代のものが比較的多い。

以上「守山中世史跡群」について概観したが、平安末～室町時代まで、政治的、宗教的に田方平野の中心地の一つだったことを窺わせる。特に留意すべきなのは、円形土坑に代表される墓域が広範囲に見られることである。また、信光寺から満願寺跡、真珠院にかけて、中世の石造塔が多数見られるが、「守山の山麓を囲む信仰圏とも呼ぶべき地域の中の胎蔵界の再生を願って大日如来の胎内に靈魂をゆだねるといった信仰】墓域を想定させる」という評価もある(葦山町史編纂委員会編 1988)。

次に「守山中世史跡群」付近の中世遺跡について見て行きたい。

守山の東北方向の至近の地に存在する正念寺遺跡は、現在の蓮長寺が建っている地とその周辺であり、2回の発掘調査が行われている(伊豆の国市教委 2009)。井戸跡5、溝状造構4、土坑2、不明造構18が検出されている。このうち井戸跡の多くは12～13世紀のものと考えられる。他の遺構の時期はほとんど不明だが、不明造構の中には近世の墓碑を埋めたものがある。遺物としては、かわらけ(手捏ね多し)、国産陶器(渥美、瀬戸美濃、常滑)、貿易陶磁(同安窯系、龍泉窯系青磁)、木製品(箸、籠、折敷)、瓦、瓦質製品、錢貨(北宋錢他)、軽石製品、鉄釘、鍋、獸骨、砥石、硯、茶臼、石塔(五輪塔、宝鏡印塔)残欠などの中世遺物が出土した。(近世の遺構・遺物については後述)。また、伝世品の石造塔も少量現存するが、その中には正応5(1292)年銘の宝鏡印塔基台があり、これには、「正念寺」の文字が刻まれている。また、ここには無縫塔の残欠も存在する。これらから見ると、この正念寺遺跡も、内容は「守山中世史跡群」の諸遺跡とほとんど同様であることが指摘できる。また、「この付近は四日町の地名が三斎市としての北条市に由来するといわれ、中世において当地域の経済的中心であったと推定される」(伊豆の国市教委 2009)という評価もある。

次に戦国時代～近世についての守山とその周辺について述べる。伝堀越御所跡については前述した。戦国～近世の遺物は各所で発見されている。また、近世遺物のうち、17世紀のものはやや少なく、18～19世紀のものが多い。

戦国時代の代表的な遺跡は守山東方の山麓にある葦山城跡である。北条早雲により築城されたとされるが、後北条氏滅亡後の17世紀初頭まで存続しており、当地域の代表的戦国式城郭である。これまで、県教委、(旧)静文研、(旧)葦山町教委、伊豆の国市教委による発掘調査が行われている。発掘調査は中～小規模な面積の調査が大半で、遺跡の全体が明らかになるようなものはないが、多次に渉る調査で徐々



に細部が明瞭になりつつある。数ヵ所の調査で堀跡が検出されている。それによれば、寛政5(1793)年の古城図と概ね一致した状況が看守される。また、部分的に障子堀が検出された。さらに城跡南部の芳池地区他では、戦国時代の屋敷跡と道路跡が複数発見されており、城下町とされている。また、城跡全体を取り囲む半円形の長大な堀の存在が予想されているが、発掘調査では未確認である(池谷 2010)。

近世の遺構としては、前述した正念寺遺跡で、墓標(寛文3(1663)年、貞享1、2(1683・1684))を埋納(片付け?)した遺構が発見されている。この他、江川家住宅や葦山反射炉などでも近世遺構の発掘調査が行われている。全体として、江戸時代の遺跡の本格的調査は少ないのが現状である。

(註1)願成就院についての、最も新しいものを含む調査成果と、想定される伽藍配置については(池谷 2010)でやや詳しく述べられている。

## 第3章 調査の方法と経過

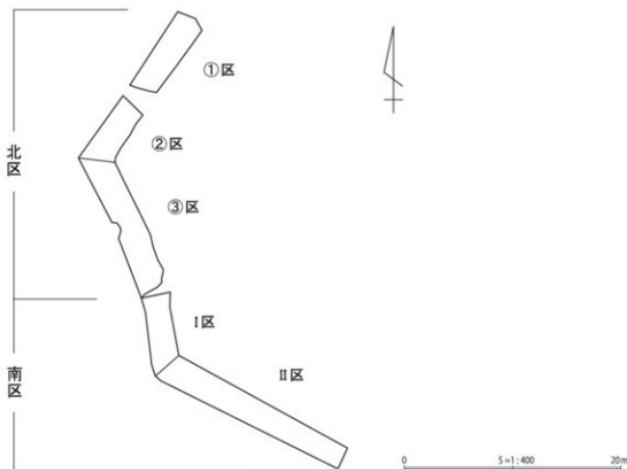
### 第1節 調査の方法

本遺跡の調査範囲はトレンチ状を呈し、途中二ヶ所屈曲している。北側・西側は切り立った崖になっており、南側・東側は平場となっているが、過去の造成等により、急角度で傾斜し個人宅にぶつかる。排土処理の関係もあり、調査区を北区・南区の二つに分け掘削を行なった(第5図参照)。北区と南区は同時進行で調査を行なったのではなく、先に北区に着手し、北区の調査の終了後に南区に着手した。表土除去、埋め戻し作業に重機(バックフォーー0.1m級)を用い、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削の諸作業は人力で行なった。遺構・遺物の検出状況はトータルステーションによる実測と写真撮影により記録を行なった。土層断面図は縮尺1/20の手実測で作成し、平面図(1/20)及び全体図(1/100)の作成は委託した。また、南区では石切り場跡の可能性のある痕跡が見られたため、委託による三次元レーザー計測作業を行なった。

写真撮影は6×7版(モノクロ)と35mm(カラー)を組み合わせて使い、適宜デジタルカメラによる補足撮影を行なった。全体写真は調査区ごとに撮影し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を各区一回ずつ実施した。

遺物の取り上げに関してはドットマップを作成した。土器・陶磁器類に関しては無彩色の竹串、石塔や鉄製品、骨類には赤く塗った竹串を使用し、取り上げ時に混同することを防いだ。

現地作業と並行し、現地事務所において基礎整理作業を実施した。遺物に関しては、洗浄・注記を行ない、種別で分け遺物番号順にコンテナに仮収納した。撮影した写真に関しては、現像が終わった段階



第5図 調査区設定図

で種別ごとのファイルに整理し、適宜見出しを作成して判別のつくようにした。デジタルカメラの撮影データは名称を付けて管理するほか、適宜バックアップを取ってデータ消失に対応した。

## 第2節 調査の経過

平成21年度の確認調査については、第1章第2節で述べたので省略する。本調査については概ね週単位で経過を記述する。

11月1日～5日

調査範囲の伐採と草刈りを行い、4日に終了する。5日には基準点測量と表土除去前検査を実施する。

11月8日～12日

重機搬入路をつくり、現場用コンテナハウス等の設営を行う。11日は北区の表土除去を行い、12日には最初の土量測定を実施する。

11月15日～19日

15日に北区表土除去後の検査を行う。同日より北区の人力掘削を開始した。同日に遺構確認を行うが、遺構が検出されなかっただため、翌16日より包含層の掘削を開始する。

11月22日～25日

包含層1の掘削を継続し、24日で終了する。五輪塔の空風輪の他やや多くの遺物が出土した。25日には包含層1の終了確認検査を実施した。

11月29日～12月5日

29日から北区の包含層2の掘削を開始し、12月3日に終了する。2日に北区の空撮を行う。4日から北区の土層断面図作成を行う。

12月6日～12月10日

北区の土層断面図作成を継続し、6日に終了する。7～9日に北区の平面図作成を行う。10日に北区の埋め戻しを行い、北区の調査を終了した。同日、南区の表土除去作業を行った。

12月15日～12月17日

15日に南区の表土土量の確認と、表土除去後段階確認検査を実施した。同日南区の表土直下の遺構検出作業を行ったが、この面では遺構は確認されなかっただため翌16日より包含層掘削を行う。

12月20日～12月24日

南区の包含層掘削を継続する。I区とII区(第5団)の境界付近を中心に、骨片がまとまって出土した。

12月27日～12月28日

南区の包含層掘削を継続する。年末年始休業のため、調査地区他の養生を行う。

1月4日～1月7日

南区の包含層掘削を継続し7日に終了する。なお、7日には研究所の安全パトロールが実施された。

1月12日～1月14日

南区の包含層下の岩盤上で見られた、ピット状の落ち込み、石列等を遺構と認定し、12日～13日に調査を行った。14日に南区の空撮を行い、完掘状況を撮影した。空撮終了後、土層断面図を作成する

1月17日～1月21日

南区の土層断面図作成を18日に終了させる。19日～21日は遺構図を含む南区の平面図作成を行う。

1月24日～2月1日

24日には重機による南区の埋め戻し作業を行う。24～28日は現場、ヤードの片づけと撤収作業を行った。2月1日には終了確認検査を行い、今回本調査に伴う現地作業を全て終了した。

## 第4章 調査の成果

### 第1節 各地区の成果と遺跡の層序

#### (1) 北区

調査は北区から開始したが、樹木の残存などにより便宜上3つの区画に分けて掘削作業を実施した。北壁から桜樹(残存させたため掘削せず)までを①区、そこから屈折部までを②区、屈折部から南端までを③区とした(前章第5図参照)。北区では包含層が2層存在していると判断したが、ここではその内容を含めて区ごとの成果を述べていきたい。

①区では岩盤の直上に土が載っており、東(東南)壁付近になると明確に落ち込むことが確認できた。西側では表土と崩落土の堆積の下が岩盤になるが、東側では表土・岩盤層を含む6層が確認できた。また、南端部が、北区中でも比較的良好な堆積を示すため、①区南(西南)壁土層断面を北区の基本土層とした(第8図)。

②区には北端部に一ヶ所テストピット(1m×1m)を設定した。これは地山または岩盤の検出を期待したものであるが、地表より約50cmで地山に達した。この深さを基準に②区では掘削を行ない、地山が出た段階で掘削を終了している。

③区では、②区の地山の続きが広範囲に続いているが、南北の中間地点よりやや北側あたりから岩盤に沿って深く落ち込むという特徴がある。この土質は②区のものと大きく異なり、岩塊を含んだ黒褐色土である。また、この上層からは多くの遺物が発見されており、五輪塔の空風輪もこの層から検出されている。包含層は南端に近づくにつれて厚くなり、上下で明確に層序が変わるので、上部を包含層1として掘削している(第6図北区土層断面図の3層)。③区南側に存在する包含層下層(包含層2)(第6図の北区土層断面図の8層)は、上層に比べ大形の岩塊を多く含むようになり、遺物の出土が1/5程度の量になるといたった差異が確認できた。

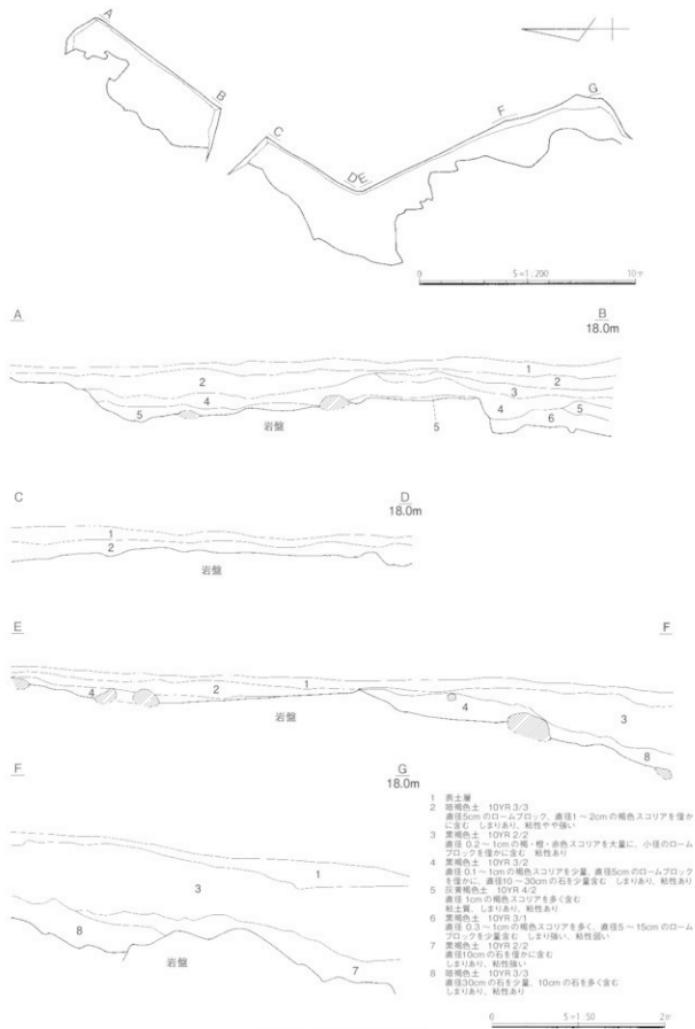
#### (2) 南区

南区では、屈折する部分を中心に北側をI区、南側をII区と設定して調査を実施した。南区では包含層1層と、遺構を数ヶ所確認することができた。遺構に関しては次節で扱うが、ここでは地形の様相、遺物の検出状況などについて区ごとに述べていきたい。

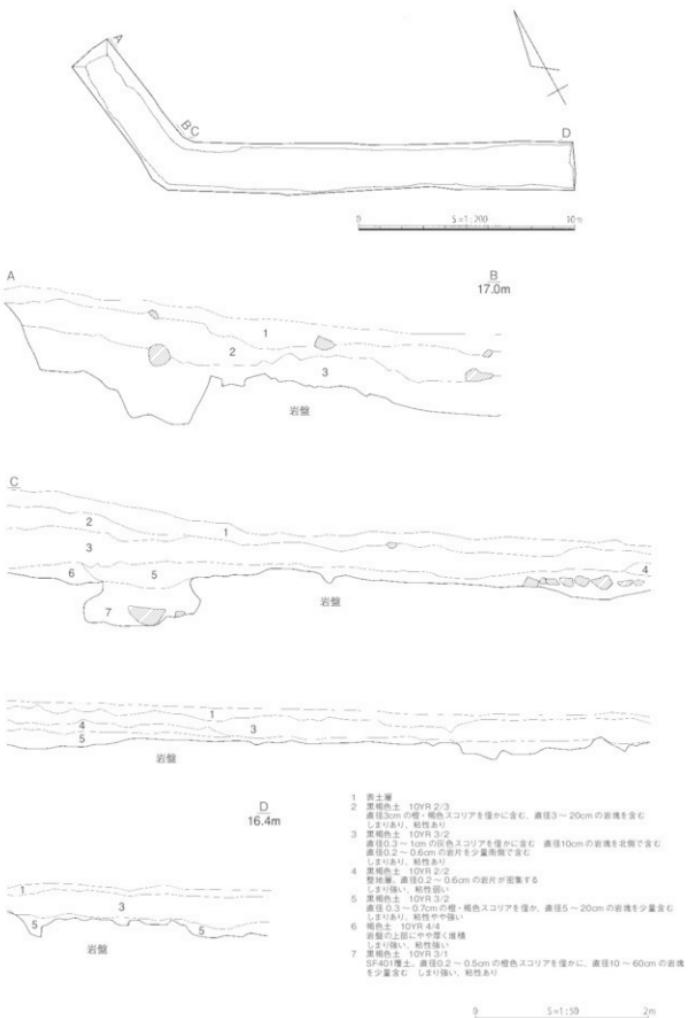
I区に関しては、北区の③区の包含層から土層が続いていると考えられるため、岩塊の入り方などが比較的似ている。ここでは直徑20cmほどの中型岩塊を多く含んでいる部分もあった。また、第1層(表土)のみならず第2層においても一部に擾乱を受けたような痕跡があることから、あまり古くない時期に土地の改編を行なっていると考えられる。他の地区との関連性を考えられる遺物としては、北区の③区で出土した澄明皿の破片と接合できるものが南区I区全域から検出されている。さらにI区とII区の境からは一定範囲に分散して骨片が出土した。これらの骨片は最大でも最大長4cmほどで、特定の部位を判別できるような破片は発見されなかった。北区③区からも同様に骨片が出土している。

II区では南北方向に大きな傾斜はなく、1区から連續した土層堆積が観察できた。

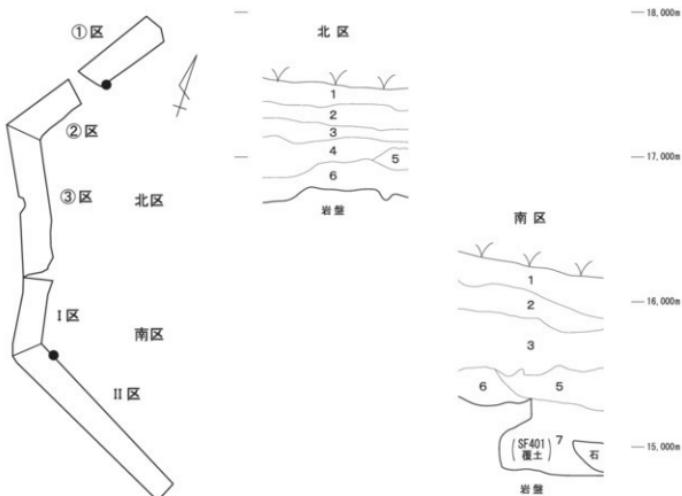
岩盤層の直上には、細かい岩片を多く含み締まりの強い層(第7図の南区土層断面図の4~5層、特に4層)が確認できた。ここからは遺物がほとんど出土せず、上面が比較的平坦であることから整地層であることが推定できる。



第6図 北区土層断面図



第7図 南区土層断面図



第8図 北・南区土層柱状図

### (3) 土層

以上述べてきたように、今回の調査区は山麓直下のため、守山の崩落土や崩落礫を多く含み、通常の自然堆積とは言い難い状況であった。また、各区によって堆積状態が異なる場合が多く、一般的な標準土層は看取し難い。ここでは、調査区中でも岩盤上の堆積が厚く、比較的堆積状況の良好な箇所を2カ所ほど選び、説明を行う。

#### i ) 北区①区東南部(南(東南)壁)(第8図)

- 1層 表土層
- 2層 暗褐色土 10Y R3／3 直径5cmほどのロームブロックを僅かに含む。直径1～2cmほどの褐色スコリアを少量含む。縮まりあり。粘性やや強い。
- 3層 黒褐色土 10Y R2／2 直径0.2～1cmほどの橙色、赤色、褐色スコリアを多量に含む。小径のロームブロックを僅かに含む。縮まりやや強く、粘性あり。
- 4層 黒褐色土 10Y R3／2 直径0.1～1cmほどの褐色スコリアを少量含む。直径5cm程度のロームブロックを僅かに含む。直径10～30cmほどの石を少量含む。縮まり、粘性あり。
- 5層 灰黄褐色土 10Y R4／2 直径1cmほどの褐色スコリアをやや多く含む。全体的に粘土質で縮まっている。
- 6層 黒褐色土 10Y R3／1 直径0.3～1cmの褐色スコリアをやや多く含む。直径5～15cm程度の大粒のロームブロックを少量含む。縮まりは強い。粘性あり(①区北側は粘性はやや弱い)。

ii) 南区II区東壁北端部(第8図)

1層 表土層						
2層 黒褐色土	10Y R2／3	直径3cmほどの橙色、褐色スコリアを僅かに含む。直径3～20cmほどの岩塊を含む。粘性あり。				
3層 黒褐色土	10Y R3／2	II区北側では直径10cmほどの岩塊を含み、直径0.3～1cmの灰色スコリアを僅かに含む。南側では直径0.2～0.6cmほどの岩片を少量含む。小怪のロームブロックを僅かに含む。締まり、粘性あり。				
4層 黒褐色土	10Y R2／2	直径0.2～0.6cmの岩片が多量に密集する。締まり強く、粘性やや弱い。整地層。(4層はこの部分に現れない。第7図のII区土層断面図を参照)				
5層 黒褐色土	10Y R3／2	直径0.3～0.7cmの橙色、褐色スコリアを僅かに含む。直径5～20cmほどの岩塊を少量含む。締まりあり。粘性やや強い。整地層か。				
6層 褐色土	10Y R4／4	締まり、粘性ともにやや強い。岩盤の上部にやや厚く堆積する。				
7層 黒褐色土 (土坑(S F 4 0 1)の覆土)	10Y R3／1	直径10～60cmの岩塊を少量含む。直径0.2～0.5cmの橙色スコリアを僅かに含む。締まりやや弱く、粘性あり。				

## 第2節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、土坑1、小穴6、石列1であった(第9～10図)。このほかに岩盤層の加工痕と思われる痕跡が散見された。

### (1) 小穴群(第11図)(第2表)

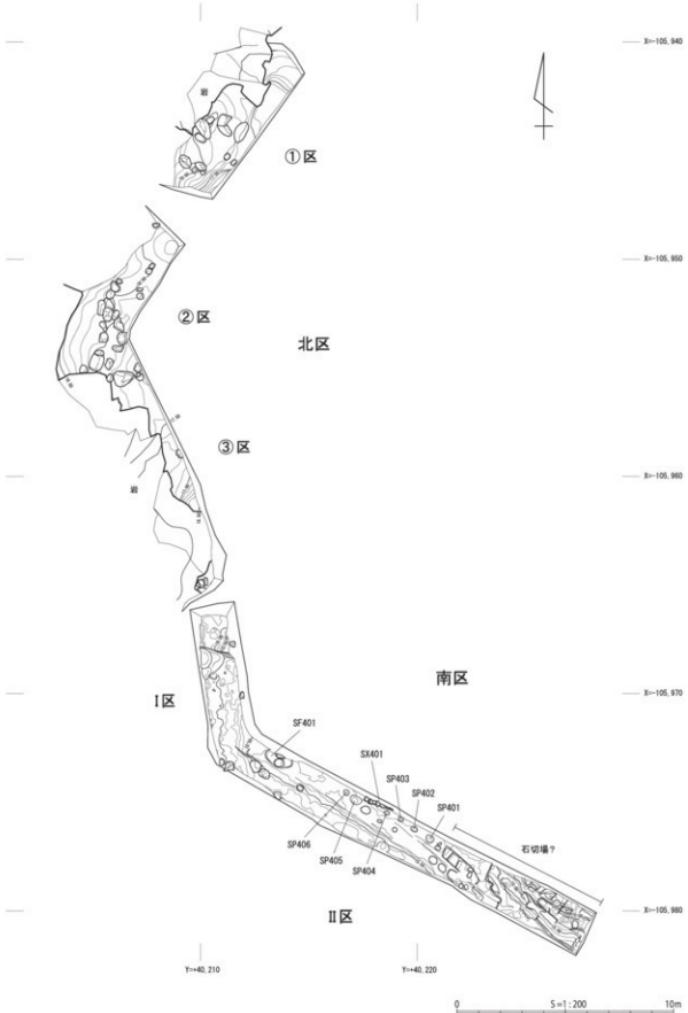
本遺跡内では、長径と短径の平均値が50cm以下のものを小穴(ピット)、それ以上のものを土坑と定義する。本遺跡で検出された小穴は、1号(SP401、以下記号については略)及び5号を除いて、きわめて径が小さく、かつ浅いことがわかる(表2)。また、この中で比較的大きい1号・5号小穴に関しても、ある程度の径はあるものの、浅いという点では他の小穴と共通する。これらの小穴は南区II区の北東壁近くに直線的に並んで検出されている。小穴は岩盤を穿って構築されており、小穴内に堆積していた土は、岩盤の直上に堆積している土と同一であると考えられる。小穴からは遺物は発見されず、遺構の時期は不明である。

第2表 遺構観察表(小穴)

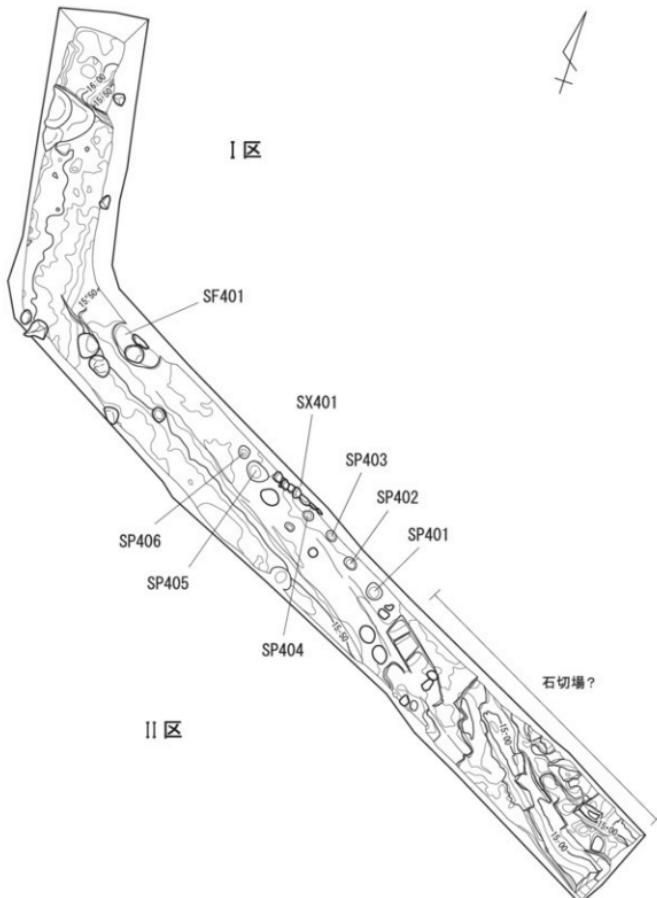
遺構名	規格	形状	断面形	時期	出土遺物
第1号小穴	SP401	0.40×0.38	不整形	鍋底状	不明
第2号小穴	SP402	0.26×0.24	0.13	不整楕円形	不明
第3号小穴	SP403	0.24×0.20	0.03	不整楕円形	不明
第4号小穴	SP404	0.25×0.24	0.06	不整楕円形	不明
第5号小穴	SP405	0.54×0.42	0.13	不整楕円形	不明
第6号小穴	SP406	0.29×0.25	0.09	不整楕円形	不明

### (2) 土坑(第12図)

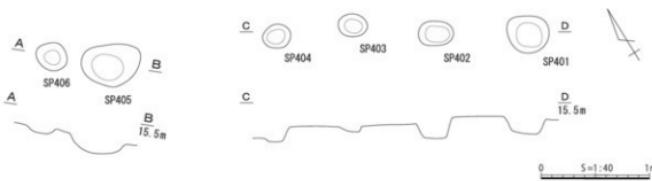
今回検出された土坑(S F 401)は、南区II区の、I区よりも箇所に存在する。直接岩盤に掘り込まれ、西北方向に長軸をもつ楕円形の平面プランである。土坑の立ち上がりは、底部近くかなりオーバーハングする。覆土は黒褐色土層一層であり、土坑内部には直径40cm～50cmの円礫を含んでいた。土坑の底部と岩盤層に2つ並んだ状態で検出されている。掘削前、西側の円礫の一つが土からはずれたが、安全



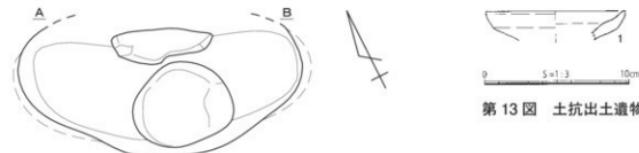
第9図 遺構全体図



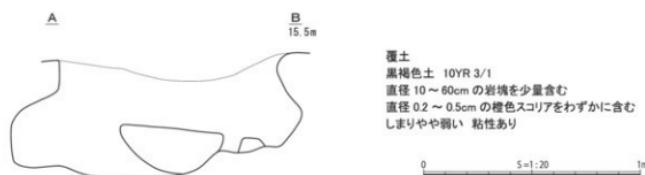
第 10 図 南区遺構全体図



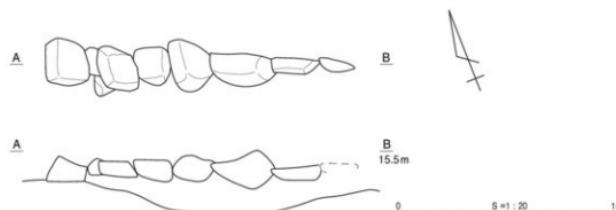
第 11 図 小穴群平面図・断面図



第 13 図 土抗出土遺物



第 12 図 土抗平面図・断面図



第 14 図 石列平面図・断面図

面に問題があると判断したため、取り上げることはなく底面の観察はやや不充分である。また、土坑の東北の一辺は調査区の際にかかっており、それに付随して東側の円窓も半分ほど埋もれていたので全体を把握することはできなかった。

覆土より近世陶磁器とかわらけの小片(第13図、写真図版5－1・2)が出土している。陶磁器は細片のため図示しなかった。遺構の時期は陶磁器の年代から近世(18世紀)以降と考えられ、かわらけは混入したものであろう。

### (3)石列ほか

その他の遺構としては規則的に並んだ石列(S X401)が検出された(第14図)。石列はⅡ区北東壁にかかる位置で検出され、約1.4mにわたって連続している。直径約10cm～30cmの角窓で構成されており、東側調査区外の平地部分に向かって延びていることが想定出来る。また、この石列は、東南側で岩盤層から20cm弱浮いた位置にある。近世以降の遺構であろう。

また、遺構という形での掘削は行っていないが、南区では岩盤に何らかの加工の跡が認められた。以前文化課の実施した確認調査では、岩盤が階段ないし井桁状になっている部分がテストピットで確認され、石切場の跡であろうという判断がなされた。そのため、石切場という前提で掘削を行なったが、面的に掘削したところ明確に石切場という判断ができるような痕跡を見つけることはできなかった。しかし、直線的な溝が岩盤に穿たれている点や、岩盤の円形を呈する盛り上がりと小穴が並ぶことなどから、人の手が何らかの形で加えられたことが想定できる(第10図)。

## 第3節 遺物

今回の調査では調査区を二分して掘削を行なった。北区からは47点の遺物が発見され、南区からは384点の遺物が確認できた(遺物の分布状況については第15図参照)。これらを分類すると、土器、瓦、陶磁器、石製品、金属製品、骨類に分類することができた。ここでは資料整理の結果より、遺物を項目別に記述する。

### (1)土器及び陶磁器(第16～18図)(図版5～9)

#### i) 古墳時代の土器(図版5－1・2)

須恵器片が2点出土している。1点は口縁部破片で、小片のため不明確ながら、小形の甕ないし壺と推定出来るものである((①))。もう一点は明らかに長頸壺の頸部と見られるものである。これは外面に自然釉が明瞭に見られる((②))。細片のため詳細にはできないが、共に7世紀のものと推定される。両者とも胎土等の点より、湖西産ではなく地元の窯で生産されたものと考えられる。

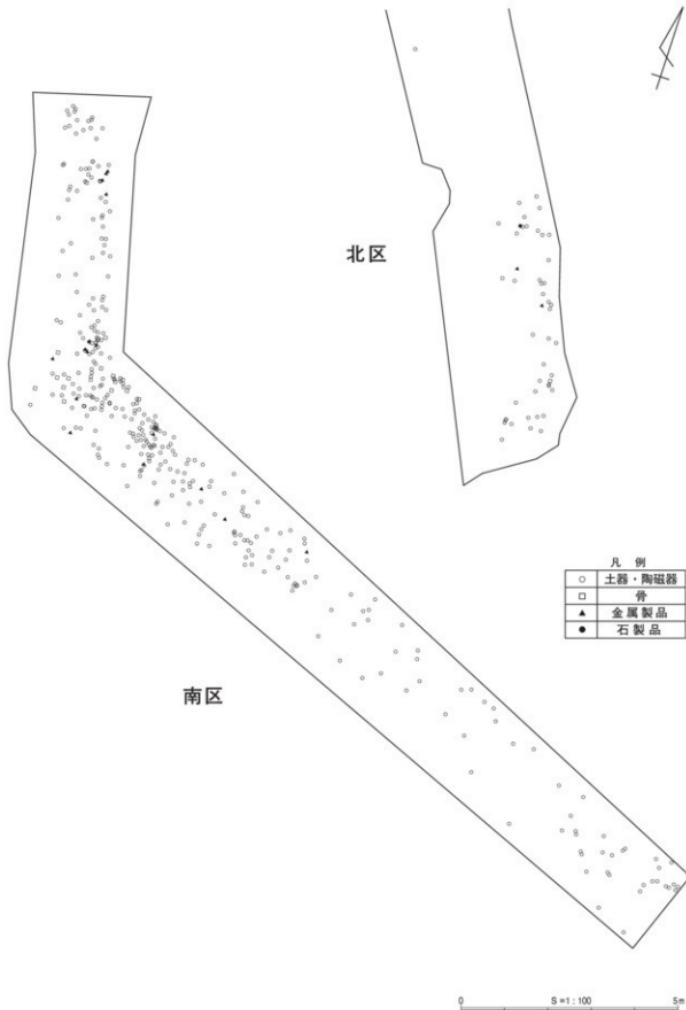
#### ii) 平安時代の土器器系皿(第16図2～3)

2点図示した。2は平底で、回転糸切り痕がかすかに認められるが、拓本では表現不能と思われたので、図示しなかった(以下同様に拓影を掲載しない底部がある)。3は高台付皿。本体の底部には極めて不明瞭ながら回転糸切り痕が認められる。渡井英吾氏の分類と編年(渡井 2009)によれば3はI期のA-3類である。11世紀第4四半期～12世紀第1四半期に比定される。2点とも器壁が厚いという特徴がある。

#### iii) かわらけ(第13図及び第16図4～6)

今回の調査では、かわらけが147点(破片数)出土した。小片のみで、図示できたものは極めて少ない。第13図のものは土坑(S F401)から出土した。第16図4と共に底部に回転糸切り痕がかすかに認められる。4と6は皿形の器形と思われる。6には底部に穿孔が行われているが、その理由は不明である。色調は4のみ暗色系で他は明色である。

#### iv) 中世～近世の陶磁器(第16～17図)(図版5～8)



第15図 出土遺物分布図

第16図7は古瀬戸の仏花瓶である。胴部は丸形でやや上半部に最大径を持つと思われる。胴の上端部に丸文を押し、その下にやや不鮮明な劍先文を胴中部に向かって、上下から中心に劍先が向くように向きを変えて描いている。このモチーフは他に類例に乏しい。鉄軸は茶褐色の飴釉で釉むらがかなり見られる。内面にも、流れた一条の釉がかかっている。藤沢良祐氏の編年(藤沢 2005)の中期様式のI~II期に比定されようか。13世紀末~14世紀前半である。

8~10は中世以降の常滑焼をまとめた。8は片口の口縁部。9は恐らく捏鉢の底部と思われる。10には内面に灰釉がかかっている。11は時期、産地とも不明で瓦質土器の可能性がある。部分的にススが付着している。

12~21は擂鉢。12と13は口縁部である。口縁の形状等より12は古瀬戸後期IV期に併行する志戸呂産でいわゆる「古志戸呂」(河合 2009)である。15世紀後半に比定される。13は瀬戸・美濃産の大窯後期のもので16世紀後半~末に位置付けられる。胴部~底部の破片は細かい時期比定は困難であるが14・15が比較的古く、古瀬戸後期段階に遡る可能性がある。ただし、15は産地不明であり、擂鉢以外に転用していると思われる。16・17は大窯段階のもの。17は底部形状等より古段階であろう。18・19は大窯期のものと思われるが判然としない。底部20・21は擂り目が密集しており、明らかに江戸時代の所産である。21が18世紀で20はそれより若干新しく、19世紀まで下る可能性がある。以上の擂鉢は特記無きものは全て瀬戸・美濃と思われる。なお16・19は二次的な焼成痕が観察できる。

22は志野の丸皿である。長石釉が内外面ともにかかっている。底部は高台までかけて、高台内は基本的に無釉とするが、流れ込んだ釉が部分的に見られる。口縁の屈曲がかなりあり、断面形状はS字状である。器壁も比較的薄く、17世紀でも比較的古い時期のものと考えられる。23は美濃の灰釉皿。底部を外周のみ残してヘラ削りした削出高台である。外面の釉はムラがあり、無釉の部分がかなり目立つ。連房式登窯により焼成されたと考えられ、17世紀後葉のものと思われる。貫入はほとんど無いが志野の可能性もある。

24は志戸呂焼の皿である。内外面とも鉄釉が満遍なくかかり、高台、高台内に及んでいる。17世紀のものであろう。25は腰部の小片であるが天目茶碗である。17世紀。

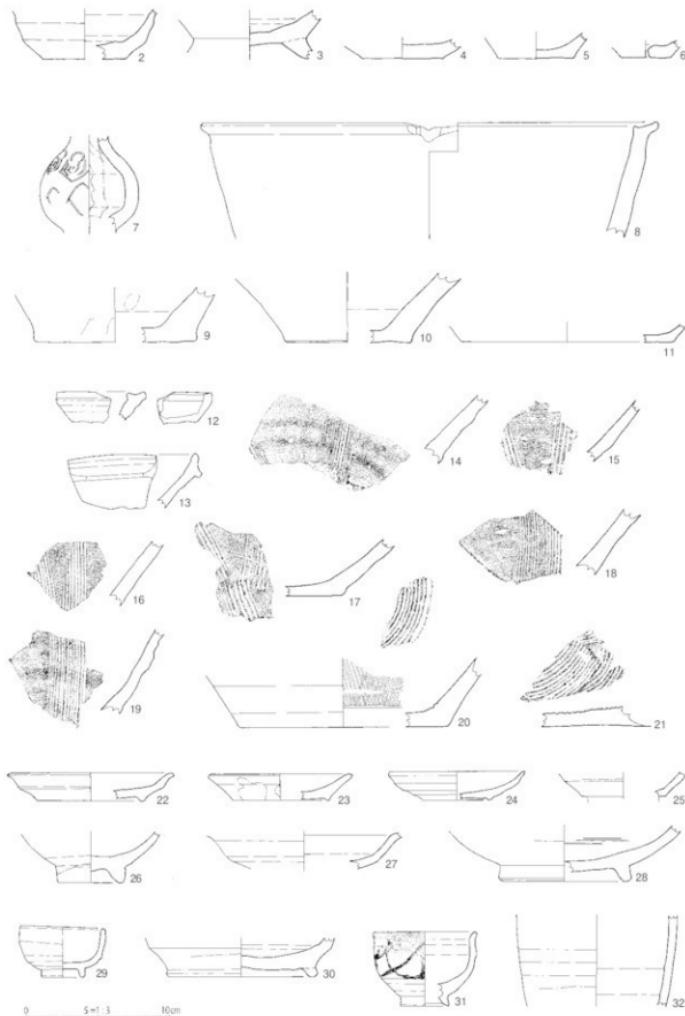
26は綠釉碗で、内外面ともに綠釉がかかっているが、高台部分は無釉となる。部分的に青色を呈す部分があり、明らかに二重掛けの釉である。これは瀬戸・美濃ではなく、肥前か京焼の可能性がある。17世紀後半~末のものであろう。27は長石釉に近い灰釉の碗だと思われるが、皿とも言えなくは無い。28は瀬戸・美濃の鉢の底部。外面は腰の部分から灰釉がかかり、欠失した胴部以上に釉がかかっているものと思われる。内面は全面灰釉がかかっている。時期は不明である。

29は瀬戸・美濃の灰釉小杯である。17世紀末~18世紀初頭のものであろう。30は瀬戸・美濃の甕ないし半胴甕の底部。内外面とも(外面は胴下部以下が無釉)鉄釉がかかっている。18世紀くらいのものであろうか。

31はビラ掛の端反り小碗で、萩焼である。外面は無釉の上に黒色の鉄釉を掛けた後、鉄釉が生乾きの状態で灰釉を掛けている。内面は灰釉である。32は灰釉が下半部を除き掛けられている。徳利であろうか。第17図33は産地不明の土鍋の口縁部である。内外面とも鉄釉が掛けられている。18世紀末以降のものであろう。34は器種不明であるが、内面には鉄釉が掛けられており、外面にはススの付着が見られる。

35と36は瀬戸・美濃の灯明皿。極めて類似度の高い破片であるが、「受け」の形状が異なっており、別個体である。内面は鉄釉が全面掛けられているが、外面は刷毛目痕が目立つ。ロクロ成形で18世紀以降のものである。

37は瀬戸・美濃の漫甕である。頂部附近に欠失した把手の接合部がある。実測図では図の左側に「注口」部があるが、僅かな痕跡を残すのみで欠失している。本例で注目すべきなのは外面に2種類の釉が



第 16 図 出土遺物（土器・陶磁器 1）

掛けられていることで、胴部にムラの目立つ鉢袖をかけた後、頂部には灰釉を掛けている（胴部には部分的に流れた灰釉の痕跡が見られる）。ロクロ口は内外面とも見られるが、内面は特に顕著である。内面は薄い鉄袖が全面に掛けられているが、「注口」部との接続部分には外面と同様の鉢袖が掛けられており、一部流れ出している。これより、「注口」部は鉢袖が掛かっていたと思われる。いずれにせよ、本例のような袖の二重掛けを行った漫瓶は類例が少ない。18世紀前葉のものであろうか。

38は磁器製の仏飯具の台部である。18世紀以降のものであろう。39は器種不明の底部。外面は鉢袖で高台まで垂れている。内面は灰釉。40は内外面とも鉢袖であるが、外面は刷毛目痕が目立つ。35・36と類似するので、灯明皿であろう。

41・42は唐津焼の鉢である。41は白泥と鉄袖で刷毛目文を描いた後、青緑釉を部分的に施した二彩唐津である。見込みは透明釉が全面に掛けられている。外面はこの破片においては無釉であるが、上部より垂れた鉄袖が見られる。見込みに砂目が1ヶ所見られる。42も類似した個体であるが内面の刷毛目には透明釉ではなく、緑釉と鉄袖が流し掛けされている。外面は無釉であるが、胴上部に部分的に鉄袖が見られる。見込みに砂目が2ヶ所見られる。共に18世紀初頭のものと見られる。43は貫入の見られる肥前青磁の大皿の底部で、17世紀末のものである。見込みには一部灰釉が見られる。

44以降は染付の磁器を集めた。基本的に肥前産と思われるが、瀬戸・美濃の可能性があるものも含まれている。44のみが17世紀であり、他は18～19世紀のものと思われる。44は網目文を描き、胎土・釉薬等で他と区別され、貫入が見られる。初期伊万里と思われる。44～56は碗である。不明なものを除き丸碗が多数を占める。第18図57・58は皿。57には変形しているが扇子が描かれている。59は小杯。60は瀬戸・美濃と思われ、御神酒酒利の底部の可能性がある。61は御神酒酒利の胴部。蛸唐草文が描かれている。19世紀のもの。62は蓋の小片。

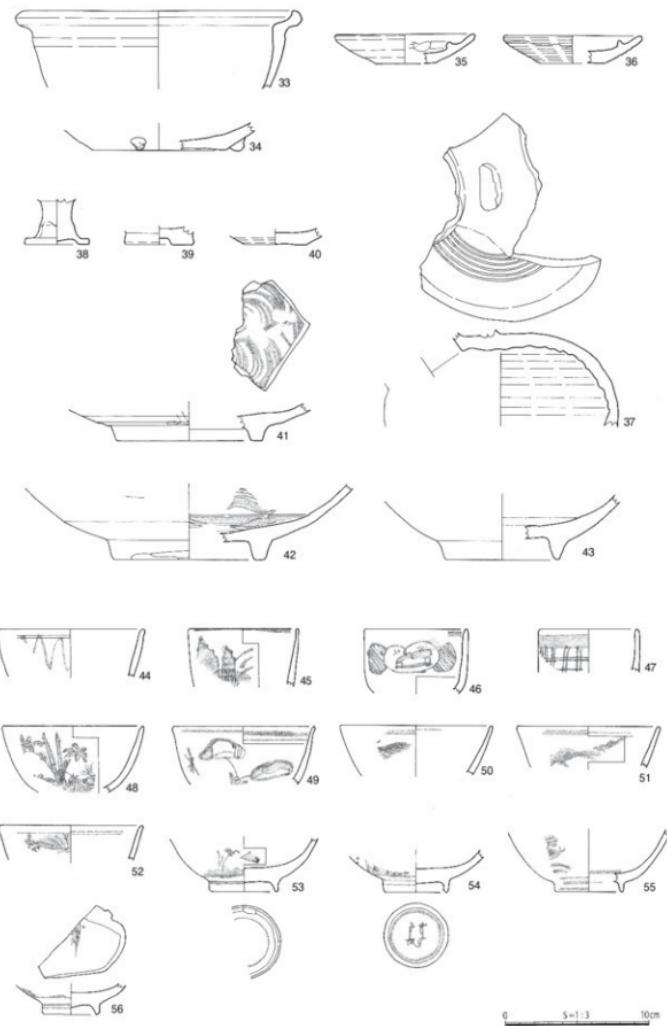
染付は破片が小さいものが多く、全体の染付模様の判るものはないが、種々雑多な絵柄である。植物関係の絵柄が多い。45の口縁には縁紅が施されている。

次に実測図では掲載しなかったが、写真図版では掲載した土器・陶磁器類について記述する（古墳時代の須恵器については先述）。

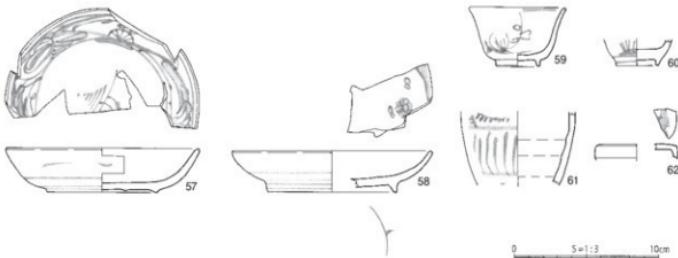
写真図版7-3・4-①は鍋進弁文の見られる青磁碗の口縁部である。龍泉窯系で、大宰府編年のⅢ期の2小期ないし3小期であり、13世紀中葉～14世紀中葉に比定される。②は白磁の皿？の底部で輸入品である。③は古瀬戸後期様式ⅢないしⅣ期の皿の口縁部。15世紀前半～後半。④は瀬戸・美濃の菊皿の口縁部で、内外面共に灰釉が掛けられているが、外面は胴以下に無釉の部分が見られる。17世紀中頃～後半のものであろう。

⑤・⑥は三島唐津である。類似した破片であるが口縁部の形態等が異なっており、別個体である。両者とも口縁端部は屈曲し、外面は鉢袖のみである。内面は白泥と鉄袖により格子目文を描く。17世紀後半～18世紀初頭に比定される。⑦は三彩土瓶の蓋。19世紀中葉～後葉のものであろう。产地は不明である。東大農学部生命科学総合研究棟地点より全く同じ絵柄と思われる蓋が出土している（東京大学埋蔵文化財調査室 2011：155頁48）。

図版7-5・6は常滑焼と思われる破片をまとめた。①は片口鉢の口縁部破片で、口縁端部は比較的丁寧な面取りがされており、中野晴久編年（中野 2005）の8ないし9型式に属すると思われる。14世紀中葉～15世紀中葉。他の破片の大半は壺又は甕と思われ、時期比定は困難である。



第 17 図 出土遺物（土器・陶磁器 2）



第18図 出土遺物（土器・陶磁器3）

(2)瓦(第19図)(図版9-1・2)

古代瓦と中世瓦が一点ずつ検出されているほか、無釉の瓦が数片出土している。後者は時期不明であり、その調整等から極めて新しい時期の可能性が高いため、今回の報告書では掲載しない。

古代瓦(63)は凸面の正格子タタキによる整形と凹面の布目痕、朱色に近い橙色の胎土(内部)が特徴的である。これは伊豆の国市(旧伊豆長岡町)にある花坂瓦窯で生産された瓦の可能性が高い。

中世瓦(64)は平瓦で、上面はタタキ目の痕跡らしきものがある。下面はナデで、端部は面取りしている。

(3)石製品(第20図)(図版9-3・4)

今回の調査で出土した石製品は、北区③区より出土した五輪塔の空風輪のみである(65)。安山岩製で、空輪の先端部(頂部)の欠損と全体的な削れ以外に目立ったヒビや割れなどはない。最大径は空輪部にあり、空輪の肩の張りが弱い。風輪との接点は丁寧かつ深いハミ痕が観察される。風輪部の下部はやや直線状になるが、上部の曲線部分との境界は必ずしも明瞭ではない。全体的に丁寧な作りである。空輪の下部のカーブが甘くなる傾向が見られ、14世紀後半～15世紀初頭のものであろうか。

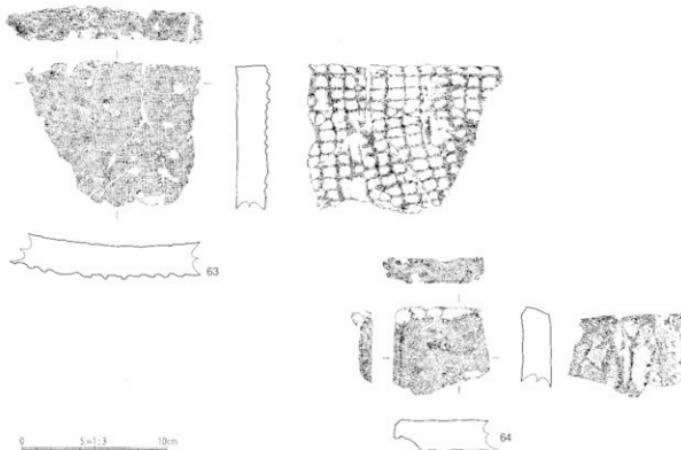
なお、今回の報告では、伊豆の国市教委による表面採集資料を合わせて掲載する。これは、平成21年12月の静岡県教委の確認調査実施中に、北区地表面より採集されたもので、伊豆の国市教委の所蔵である。宝鏡印塔の相輪部上部である(66)(註1)。安山岩製で、宝珠は上端が僅かに欠失しているが、宝珠下の請花とともにほとんど完全に遺存している。九輪は上部四分の三が残存し以下は欠失している。宝珠は丸みを帯び、比較的古様を示す。本例で特筆すべきなのは、上部のみ残存した請花であり、4単位の大きな蓮弁が深く立体的に彫り込まれている。また反花間の子弁も立体的であり、全体的に古様を示す。九輪部分については区画する線は細線状であり、断面V次状の古いタイプのものではない。以上を総合して、14世紀中頃～後半のものと考えた。前述の五輪塔残欠より時代的には古くなる。

(4)金属製品(第21図)(図版9-5)

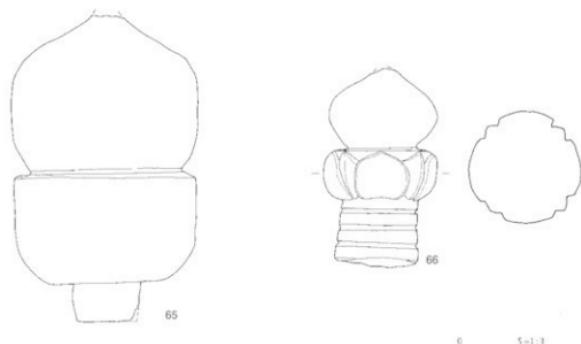
発見されたのは、全て鉄製品であり、現地では19点を確認した。このうち7点を図示した。67～70は釘である。何れも断面が角張った角釘(和釘)である。67は頭(かしら)部も脚部(注2)も欠損しているが、頭部の残存部より頭巻釘であろう。68はほぼ完形品と思われる。レントゲン写真(本報告未掲載)で観察すると頭部に折返しの状況が確認される。恐らくは67と同様に頭巻釘と考えられる。69・70は頭部が欠損しているため、細別不能である。

71は火打金である。山形を呈し、小孔がある。これは山田清朝氏分類(註3)のA-b類に比定される。山田氏の集成(註4)によれば、A-b類の火打金の出土遺跡として、青森県浪岡城跡、岩手県柳田館、

栃木県日光男体山山頂遺跡、千葉県大道遺跡、東京都武藏岡遺跡、同八王子城跡、同下宿内山遺跡、長野県杉の木平遺跡があげられている(註5)。また、本県では管見に入ったものとしては静岡市小瀬戸遺跡(静岡市教委 2009)、富士宮市浅間大社遺跡神立山地区(静文研 2009)の出土例があることも判明した。本遺跡出土例を、管見に入った他のA - b類の火打金と比較すると、以下の特徴が指摘できる。①身部から突出部までの外形のカーブが緩く、他のA - b類の例に比べてA - a類とされた二等辺三角形



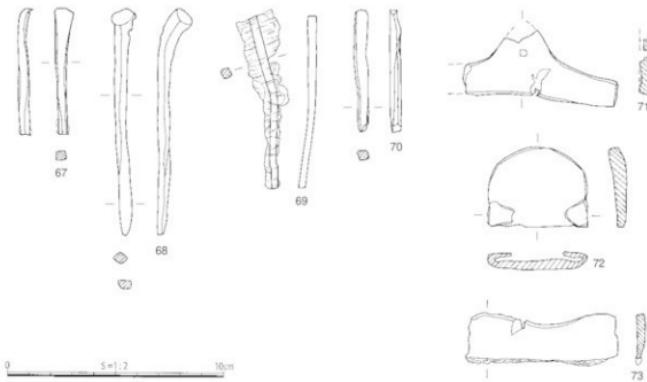
第19図 出土遺物（瓦）



第20図 出土遺物（石製品）

のものに比較的近い。②身部の左右の端部(実測図の右側のみ残存)が直線的で、他例の多くと異なり丸くならない。このような特徴を念頭において他に類似例がないか検討した。その結果、最も類似するのは、岩手県柳田館出土の一例((岩手県教委 1980)の第200図339)であった。これは16世紀～17世紀のものと考えられる。ただし身部の左右の端部は本遺跡例のようにきちんとした直線状となるかという点については若干躊躇せざるを得ない。何にせよ、このA・b類は平安時代から存在するには確実であり、本遺跡例の所属時期については厳密には不明と言わざるを得ないが、他の遺物や前述の類似例の存在から16～17世紀のものと一応考えておきたい。

72は左右の両端部を折り返した鉄製品である。用途等不明であるが、同様のものが静岡市小瀬戸遺跡で出土している(静岡市教委 2009: 154頁の6)。73も不明であるが、実測図では下方にあたる1辺に木質部の残存部分と思われる付着物が観察できる。



第21図 出土遺物(金属製品)

##### (5)骨類

骨類は細片まで含めて22点が出土した。前述したように、南区のⅠ区とⅡ区の境から一定範囲に分散して出土したものが多数を占め、北区③区からも一部出土している。極めて微細な破片が多く、最も大きな破片でも最大長約4cm程度であった。また、骨片の多くに被熱した痕跡が看取された。関節などの部位は一切見られない。

当初、これらの骨片について、比較的大きな破片を数枚抽出し、自然科学分析を行う予定であった。人骨か獣骨だとすると何の骨かを確認したいと考えたためであった。しかし、実際に分析を行うにあたって専門家と協議したところ、残存部位や被熱の状況等の点から、通常の組織観察の方法では何らの結果も得られない可能性が強く示唆された。そのため、今回の整理作業では分析 자체を中止することにした。また、前述したように、極めて小さく且つ破碎されたものが大部分を占めるため、実測図や写真図版としては掲載せず、出土の事実を記載するに止めておく。

- (註1)宝篋印塔以外の塔(多宝塔など)の可能性も皆無ではないが、当地方では極めて少ないので、宝篋印塔のものと考えた。
- (註2)釘の各部分の呼称については、(金箱 1984)に依った。
- (註3)火打金の分類については、山田清朝氏の分類に依った。山田氏は火打金を「山形(A類)」・「カスガイ形(B類)」・「短冊形(C類)」に大別する。さらにA類を、a類(「平面二等辺三角形をなし頂部に縫孔を穿つもの」)、b類(「紐孔部分のみが突出し、凸形をなすもの」)、c類(「三角形の両底角が上方に反りあがり、打撃部が弧状ないしその傾向にあるもの」)、d類(「c類の反りあがりがさらに発達し、頂部まで達するもの」)、e類(「全体にすかしを施すもの」)に細別する(山田 1989)。
- (註4)1989年に発表されたものであり、それ以降の資料の増加があることは言うまでもない。ただし、今回の報告においては新たな資料の検索・集成を行わず、この段階での山田氏の集成を基にして記述する。
- (註5)山田氏の集成表(報告書27表)では、このほかに千葉県谷津遺跡例もA・b類として記載されている(備考では「c類?」とされているが)。ただし、これは出典(高嶋 1985)で確認したところ、身部の左右の両端部分が反り上がるA・c類であることは明らかである。従ってA・b類の類例から除外した。

第3表 遺物観察表

## 土器・陶磁器（1）

目 次 番 号	種 別 番 号	取 上 者 番 号	種 類	器種	計測値( )は復原値		複合率	色調	胎土	特記事項
					口径 (cm)	底径(cm) 高台径(cm)				
第16回 1 422	かわらけ	かわらけ	口	口縁部~底部20%	5.9	6.6	白色粒子(少) 黒色粒子(少) 赤褐色粒子(少) 黑色粒子	土灰(F401)埋土出土		
第16回 2 032	土師器	皿	—	(5.8)	3.5	3.5	底部~底部25%	□:○:■焼YR 6/4	白色粒子 黑色粒子 赤褐色粒子 透明粒子(少) 黑色粒子(少)	平安時代 滋賀系切削
第16回 3 052	土師器	高台皿	—	(7.8)	3.4	3.4	底部50%	燒YR 6/6	鐵石系の白褐色粒子(少) 6mm(多) 黒色粒子(少) 赤褐色粒子(少)	平安時代
第16回 4 280	かわらけ	かわらけ	口	(5.6)	1.3	1.3	底部25%	燒YR 5/6	白色粒子(少) 透明粒子(少) 赤褐色粒子(少) 黑色粒子	直部系切削
第16回 5 059	かわらけ	かわらけ	—	(5.4)	1.6	1.6	底部60%	燒YR 7/6	白色粒子(少) 黑色粒子(少)	直部系切削
第16回 6 364	かわらけ	かわらけ	口	(3.5)	1.2	1.2	底部30%	燒YR 7/6	白色粒子(少)	
第16回 7 298	仙人瓶	仙人瓶	脚部最大径(6.8)	6.7	脚部25%	—	—	白色粒子 黑色粒子	粗粒 14世紀	
第16回 8 087	陶器 変通	片口	(31.4)	—	8.0	□:脚部9%	—	白色粒子 白色透明粒子(多)		
第16回 9 031	陶器 変通	變	—	(11.4)	3.6	底部12%	—	白色粒子(多) 透明粒子(多) 白色透明粒子(多) 黑色粒子(多) 透明粒子(少) 黑色粒子		
第16回 10 236	陶器 変通	變	—	(8.9)	3.6	底部20%	—	白色粒子(多) 白色粒子(多) 白色透明粒子(多) 黑色粒子(多)		
第16回 11 064	五質 土器?	—	(14.7)	1.2	底部11%	—	白色粒子 黑色粒子			
第16回 12 171	陶器 吉野山	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(多) 透明粒子(多)		
第16回 13 078	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子		
第16回 14 023	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少) 透明粒子(少)		
第16回 15 203	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少)		
第16回 16 036	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少)		
第16回 17 140	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少) 黑色粒子(多)	やや軽質 滋賀系切削	
第16回 18 130	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少)		
第16回 19 015	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少)	器口の上に指捺圧痕有	
第16回 20 041	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	(14.6)	4.6	—	—	白色粒子 黑色粒子 赤褐色粒子(少)		
第16回 21 103	陶器 漏斗・水道	鐘鉢	—	—	—	—	—	白色粒子(少)	底部系切削	
第16回 22 408	陶器 古野	丸皿	(11.5)	(7.4)	1.9	口縁部~底部25%	—	灰色粒子(少) 赤褐色粒子(少)		
第16回 23 371	陶器 古野	小皿	(10.0)	(6.6)	1.6	口縁部~底部17%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)		
第16回 24 223	陶器 芦戸呂	小皿	(9.3)	(4.7)	2.0	口縁部~底部25%	—	白色粒子(1mm以下~4mm)		
第16回 25 296	陶器 漏斗・水道	天目茶碗	—	—	—	底部下部25%	—	白色粒子 黑色粒子 赤褐色粒子(少)		
第16回 26 410	不明	410 412	肥前? 空燒?	—	4.6	3.5	底部100%	燒YR 7/7 7.5/3	白色粒子(少)	
第16回 27 159	陶器	碗	—	—	2.5	体部12%	—	白色粒子含C		
第16回 28 277	陶器 漏斗・水道	灰陶鉢	—	(9.2)	3.9	底部35%	—	白色粒子(多) 黑色粒子(多) 黒色の吹き出し(多)		
第16回 29 331	陶器 漏斗・水道	灰陶小鉢	5.7	2.8	3.5	口縁部~体部60% 底部100%	—	透明粒子(石英?) 黑色粒子(少)		
第16回 30 341	陶器 漏斗・水道	磨毛土山 半球形	—	10.5	2.7	底部100%	—	白色粒子(多) 黑色粒子(少) 透明粒子(3mm大含む) 中や粗		
第16回 31 017	陶器 箱舟	口縁部小 鉢	(7.0)	(3.2)	5.2	口縁部~底部27% 底部8%	—	白色粒子 黑色粒子		
第16回 32 073	陶器	利?	—	—	6.3	脚部17%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)		
第17回 33 392	陶器	土鍋	(18.6)	—	5.4	口縁部~脚部12%	—	白色粒子		
第17回 34 074	陶器	不明	—	(9.2)	1.9	底部13% 足1個	—	白色粒子		
第17回 35 009	陶器 漏斗・水道	打叩皿	(9.4)	(4.1)	2.0	口縁部~底部5%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)		
第17回 36 302	陶器 漏斗・水道	打叩皿	(9.2)	(4.2)	1.9	口縁部~底部39%	—	白色粒子(多) 黑色粒子		
第17回 37 316	陶器 漏斗・水道	深盤	脚部最大径(16.1)	6.7	脚部上25%	—	白色粒子(少) 黑色粒子			
第17回 38 322	陶器 漏斗・水道	仏龕器	—	(4.3)	3.1	脚部54%	—	白色粒子		
第17回 39 279	陶器 漏斗・水道	不明	—	4.6	1.2	底部100%	—	白色粒子 黑色粒子		
第17回 40 052	陶器	打叩皿?	—	(4.2)	1.1	底部50%	—	白色粒子(多) 黑色粒子		
第17回 41 185	陶器 二彩装	鉢	—	(10.2)	2.6	底径22%	—	白色粒子 赤褐色粒子		
第17回 42 108	陶器 二彩装	鉢	—	(10.7)	5.2	脚部一部 底部 20%	—	白色粒子(多) 黑色粒子(少)		

## 土器・陶磁器（2）

図 番号	検 査 番号	取上 番号	種別	器種	計測値：（□複数値）			焼成率	色調	胎土	特記事項
					口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)				
第17回	43	376	青磁 肥前	太皿	—	(7.8)	4.5	底部25%	—	黑色粒子(多)	
第17回	44	299	青磁 肥前	染付碗	(10.1)	—	3.5	口部 ～全体上半12%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)	
第17回	45	068	青磁 肥前	染付碗	(7.7)	—	4.0	口部～全体1%	—	白色粒子(多)	
第17回	46	136	青磁 肥前	染付碗	(7.0)	—	4.4	口部～全体50%	—	白色粒子	
第17回	47	283	青磁 肥前	染付碗	(6.7)	—	3.0	口部 ～全体上半25%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第17回	48	396	青磁 肥前	染付碗	(9.7)	—	4.6	口部～全体14%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第17回	49	333	青磁 肥前	染付碗	(9.7)	—	4.0	口部～全体31%	—	白色粒子(少)	
第17回	49	343	青磁 肥前	染付碗	(9.7)	—	4.0	口部～全体14%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第17回	50	404	青磁 肥前	染付碗	(10.4)	—	3.4	口部～全体13%	—	白色粒子	
第17回	51	308	青磁 肥前	染付碗	(9.8)	—	2.9	口部～全体上半11%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第17回	52	138	青磁 肥前	染付碗	(9.8)	—	2.4	口部 ～全体上半14%	—	白色粒子 黑色粒子	
第17回	53	—	青磁 肥前	染付碗	—	(4.8)	3.7	全体50%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第17回	54	403	青磁 肥前	染付碗	—	(4.3)	2.9	底盤100% 黑色33%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)	
第17回	55	067	青磁 肥前	染付碗	—	(4.7)	4.3	全体～台13%	—	白色粒子(多) 黑色粒子(少)	
第17回	56	383	青磁 肥前	染付碗	—	(3.7)	2.0	底盤50% 黑色27%	—	白色粒子 黑色粒子(多)	
第18回	57	132	青磁 肥前	染付皿	(13.1)	(7.0)	3.0	口部～全体39% 底盤50%	—	白色粒子(少) 黑色粒子(少)	
第18回	58	231	青磁 肥前	染付 盆	(13.6)	(8.8)	2.8	口部～全体88% 底盤17%	—	白色粒子 黑色粒子(少)	
第18回	59	186	青磁 肥前	染付 小鉢	(6.4)	(3.0)	4.05	口部20% 全体～底盤50% 全体20%	—	白色粒子(多) 黑色粒子(少)	
第18回	60	249	青磁 瀬戸・美濃 御神酒 詰利?	染付 盆	—	2.8	1.8	底盤100%	—	白色粒子 黑色粒子	
第18回	61	091	青磁 肥前	染付 盆	—	—	5.1	脚下半周17%	—	白色粒子 黑色粒子(多)	
第18回	62	126	青磁 肥前	染付 盆	天井 部径 (5.6)	—	1.1	口縁部 ～天井部10%	—	黑色粒子	

## 瓦

図番号	検査番号	取上番号	器種	計測値 厚さ(cm)	色調			胎土	特記事項
					口縁 部	底 部	側面		
第19回	63	066 293 300	平瓦	2.5	四面 長方形 110×7.1	凸面：褐色	IV面：R6.1/1 裏面：少々褐色 SYR 6/4	輕石粒	白色粒子 黑色粒子 透明粒子 花板瓦家庭用
第19回	64	133	平瓦	2.3	浅黃	25.7	7/3	白色粒子(少)	透明粒子(少) 黑色粒子(多)

## 石製品

図番号	検査番号	取上番号	器種	計測値 (cm) [ ] は残存値			石材	特記事項
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
第20回	65	040	五輪塔 宝篋輪部	全高 (21.1) 空輪高 (10.9)	萬葉高 7.5	キゾ高 2.7	安山岩	
第20回	66	—	宝篋印相輪部	空輪径 12.8 全高 (13.7) 空輪高 (6.6)	キゾ径 10.4 萬葉径 3.5	キゾ径 4.7 萬葉径 (5.6)	安山岩	伊豆の国市教育委員会所蔵

## 金属製品

図番号	検査番号	取上番号	器種	計測値	計測値			特記事項
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
第21回	67	295	釘	5.65	0.88	0.45	全体に木質付着	
第21回	68	255	釘	10.41	1.15	0.50		
第21回	69	399	釘	7.90	0.45	0.45		
第21回	70	256	釘	5.65	0.70	0.45		
第21回	71	36	火打金 (山形)	7.18	3.00	0.48		
第21回	72	21	不明	3.68	4.60	0.68		
第21回	73	275	不明	7.03	2.15	0.43	厚みの薄い側に木質付着	

## 第5章　まとめ

### (1) 遺跡・遺構について

今回の調査は、調査区の幅が2～3m程度の、ほとんどトレンチ調査といって良い規模であった。従って、遺構や遺物の平面的な広がりを明らかにすることはかなり困難であって、調査の成果については、限定的なものにならざるを得ない。

南区の一部で遺構が検出されたほかには、土地に入り手が加えられた痕跡はあまり顕著には見られなかった。一部に石切場の可能性がある痕跡が見られる箇所も見られたが、明確にすることはできなかつた。北区においては、明確な遺構は発見されず、遺物も少なく、かつては人がほとんど立ち入らない地区だった可能性がある。

南区では、調査区の東側にひろがる平坦部に向かって遺構がやや集中して発見されている箇所がある。Ⅱ区東北壁で検出された石列(S X402)も、平坦部に向かって続いていると想定できる。本遺跡では、(旧) 茅山町教委の行った第2次調査において、列状の石列や、石疊状の集石遺構が検出されている。今回の調査地点の近接地であり、何らかの関連が想定できる。また、石列に近接して検出された、列状に並んだ小穴群については、建物の柱穴列ないし柵列などが想定できるが、調査範囲が狭小なため、詳述できない。また、土坑(S F401)も土坑墓か否か断定はできない。これらの遺構群はいずれも近世以降のものと判断した。何にせよ、今回の調査で、中世～近世の満願寺の実在を確証できる資料は遺構等の上からは見いだされなかった。

### (2) 遺物について

今回の調査の遺物出土状況は第15図で示した。北区は③区の南側まで遺物の分布は見られるが、それ以北には遺物の出土は無かった。分布密度は南区のⅠ区とⅡ区の境界部分付近が最も高く、土器・陶磁器以外の骨や金属製品の大半はここから出土している。近世の遺物が主であるが、古代～中世、近代の遺物の出土もあった。遺物は元々調査箇所部分にあったもののか、守山の崩落土とともに移動してきたもののが存在していると考えられる。

「守山中世史跡群」内では原始～古代の遺物も出土する。今回の調査において、古代の遺物としては、1片のみの出土であるが、花坂窯産と考えられる平瓦が出土しているのが注目される。古代瓦の出土例は、史跡北条氏邸跡、史跡伝堀越御所跡、御所之内遺跡(史跡範囲外部分)等で散見される。

古墳時代や平安時代の遺物の出土もあるが、極めて少量なので、これらから何かを導きだすのは難しい。

中世の遺物も必ずしも多くないが、本遺跡とその周辺の中世を考える上で重要な資料が出土している。守山周辺は、ほぼ全面的に中世の遺構・遺物が見られる地域であり、本遺跡の存在する守山東麓・南麓は中世の土坑墓や石造物が多く見られる地域として、今回の発掘調査を実施する以前より既に周知であった。今回報告する五輪塔や宝篋印塔は、14世紀～15世紀に本遺跡内ないし近接地で該期の石塔が造立された状況を想定させる。また、第16図の7として掲載した仏花瓶は、本遺跡初の事例である。これらの資料から直ちに満願寺の実在について証明されるわけではないが、伊豆の国市教委(旧茅山町教委)の調査地点の成果も合わせて考えると、14世紀以降に本遺跡が何らかの宗教的な場であったことは疑えない。

本遺跡において、遺物の主体を占めるのは、近世の陶磁器である。調査面積と比較して、やや多くの点数が出土している。18～19世紀の遺物が比較的多い。近世の下田街道は、本遺跡周辺では現在の國

道136号線とほぼ同一と考えられるが、現存する近世絵図(註1)によれば街道に沿って人家が建ち並ぶ状況が窺える。本遺跡にも集落が広がっていたことが想定できる。当地域における近世史研究について、考古学資料の蓄積はまだ少ないので、研究の一助となる資料になることを報告者は希望している。

(註1)「寛文七年水論裁許絵図」、「宝永五年水論裁許状」。ともに『蘿山町史』第五巻下(蘿山町史編纂委員会 1991)所収。

### 引用・参考文献

- ・赤羽一郎 1984 「常滑焼－中世窯の様相－」ニューサイエンス社(考古学ライブラリー 23)
- ・秋山富南(原著)高橋廣明(監修) 2003 『豆州志稿 復刻版』羽衣出版
- ・池谷初恵 2010 『鎌倉幕府草創の地 伊豆蘿山の中世遺跡群』新泉社
- ・伊豆学研究会編 2010 『伊豆大事典』羽衣出版
- ・伊豆の国市教育委員会 2006 『伊豆の国市埋蔵文化財調査報告Ⅰ』
- ・伊豆の国市教育委員会 2008 『伊豆の国市埋蔵文化財調査報告Ⅲ』
- ・伊豆の国市教育委員会 2009 『伊豆の国市埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- ・岩手県教育委員会 1980 『東北縱貫自動車道開通係埋蔵文化財調査報告書－IV-(柳田館遺跡)』岩手県文化財調査報告第53集
- ・江戸遺跡研究会編 2001 『因説江戸考古学研究事典』柏書房
- ・金箱文夫 1984 「近世の釣」物質文化 43
- ・河合修 2009 「古志戸の匣鉢詰め、窓詰め法」研究紀要第15号・(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・(財)静研 2009 「浅間大社遺跡、山宮浅間神社遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第201集
- ・財団法人灘戸市文化振興財団 2006 「江戸時代の灘戸・美濃－三都と名古屋－」
- ・財団法人灘戸市文化振興財団 2006 「江戸時代のやきもの－生産と流通－」
- ・静岡県教育委員会 2011 「静岡県文化財年報(平成21年度)」
- ・静岡市教育委員会 2009 「小瀬戸遺跡」
- ・高崎幸男 1985 「火の道具」柏書房
- ・田口昭二 1983 「美濃焼」ニューサイエンス社(考古学ライブラリー 17)
- ・東京大学埋蔵文化財調査室 2011「東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度」
- ・東京都埋蔵文化財センター 2010 「文京区後楽二丁目南遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第241集
- ・戸羽山瀬 1967 「増訂豆州志稿伊豆七島全」長倉書店
- ・中野晴久 2005 「常滑・渥美焼」陶器から見る静岡県の中世社会 発表要旨・論考編】菊川シンポジウム実行委員会
- ・柄崎彰一編 1989 「昔と瓶 日本の陶磁－古代・中世編3 瀬戸・美濃」中央公論社
- ・蘿山町教育委員会 1990 「満願寺跡第3次発掘調査概報」
- ・蘿山町教育委員会 2002 a 「蘿山町埋蔵文化財調査報告Ⅰ」
- ・蘿山町教育委員会 2002 b 「史跡北条氏邸発掘調査報告書Ⅰ」
- ・蘿山町史編纂委員会編 1988 『蘿山町史』第四巻
- ・蘿山町史編纂委員会編 1991 『蘿山町史』第五巻(下)
- ・蘿山町史編纂委員会編 1995 『蘿山町史 通史Ⅰ』第十巻
- ・林屋晴三編 1988 「昔と瓶 日本の陶磁2 志野」中央公論社
- ・藤沢良祐 2005 「瀬戸美濃と志野呂・初山」陶器から見る静岡県の中世社会 発表要旨・論考編】菊川シンポジウム実行委員会
- ・山田清朝 1989 「火打金について」[中尾城跡]兵庫県文化財調査報告第67冊
- ・横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 形式分類と編年を中心にして」[九州歴史資料館研究論集] 4
- ・渡井英昇 2009 「浅間大社遺跡における土師器皿の変遷(予察)」[浅間大社遺跡・山宮浅間神社遺跡]静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第201集

写 真 図 版

図版1



1 守山全景（南東より）



2 北区完堀状況（南東より）

図版2



1 南区完堀状況（北東より）



2 南区II区完堀状況（北西より）

図版3



1 南区Ⅰ区完堀状況（南より）



2 北区③区完堀状況（北より）



3 北区②～③区完堀状況（北東より）



4 土抗（SF401）（北東より）

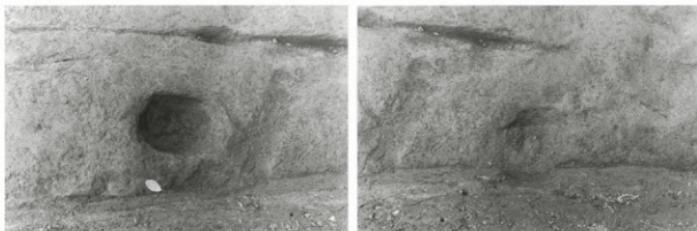


5 石列（SX401）（南より）



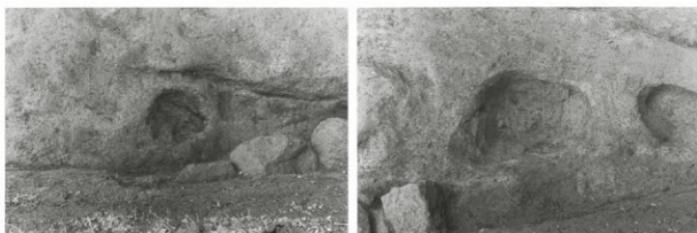
6 1号小穴（SP401）（北東より）

図版 4



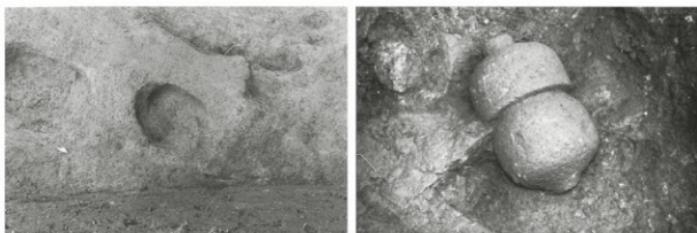
1 2号小穴 (SP402) (北東より)

2 3号小穴 (SP403) (北東より)



3 4号小穴 (SP404) (北東より)

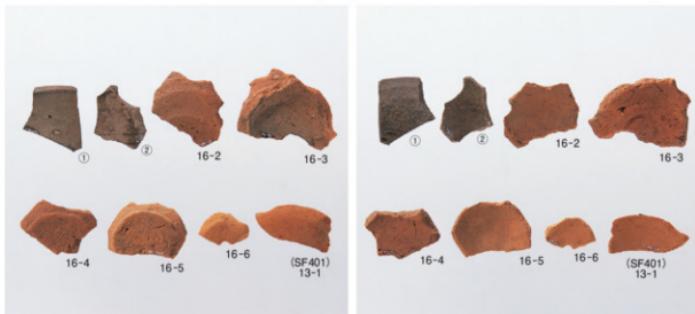
4 5号小穴 (SP405) (北東より)



5 6号小穴 (SP406) (北東より)

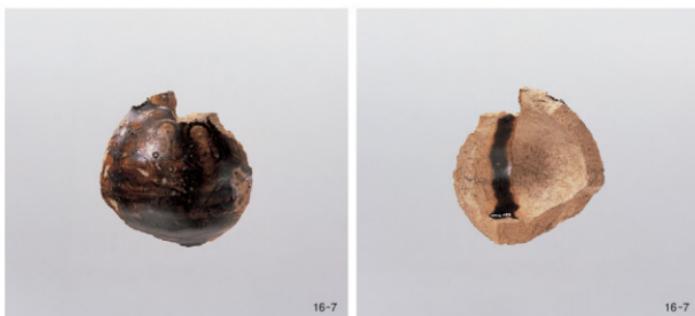
6 五輪塔残欠出土状態 (北区)

図版5



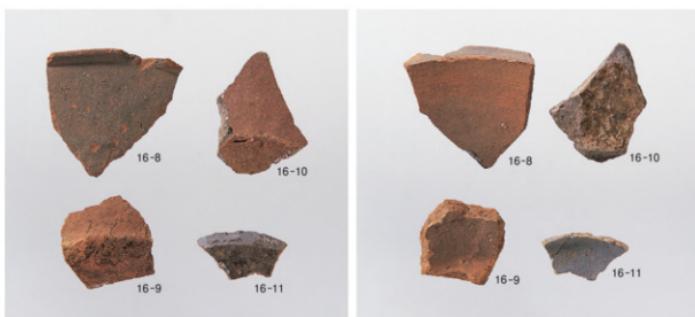
1 須恵器・かわらけ他 (外面)

2 須恵器・かわらけ他 (内面)



3 仏花瓶 (外面)

4 仏花瓶 (内面)



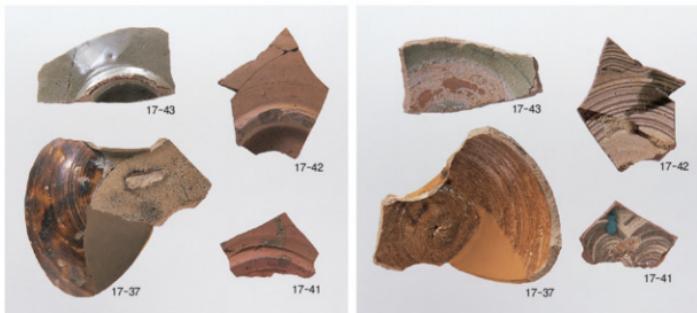
5 常滑焼 (外面)

6 常滑焼 (内面)

図版 6



図版 7



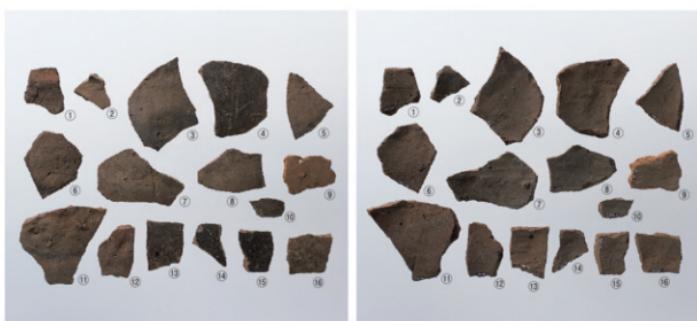
1 近世の陶器（外面）

2 近世の陶器（内面）



3 中世～近世の陶磁器（外面）

4 中世～近世の陶磁器（内面）



5 常滑焼（外面）

6 常滑焼（内面）

図版8



16-29

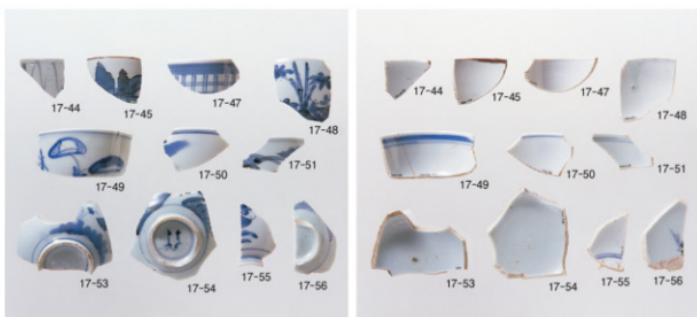
18-59

17-46

1 近世の陶器（小杯）

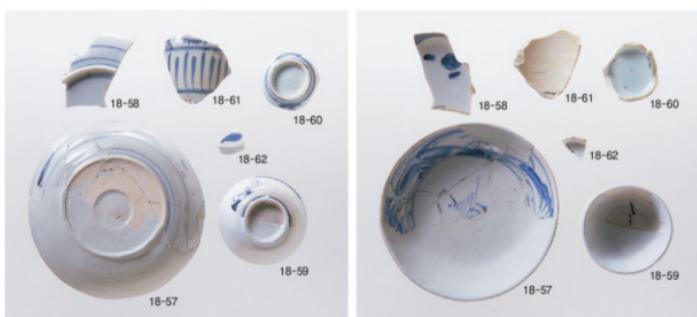
2 近世の磁器（小杯）

3 近世の磁器（碗）



4 近世の磁器（外面）

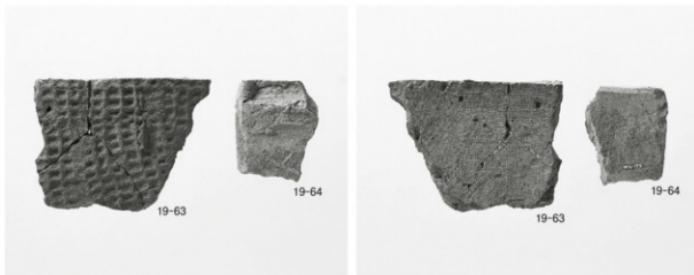
5 近世の磁器（内面）



6 近世の磁器（外面）

7 近世の磁器（内面）

図版9



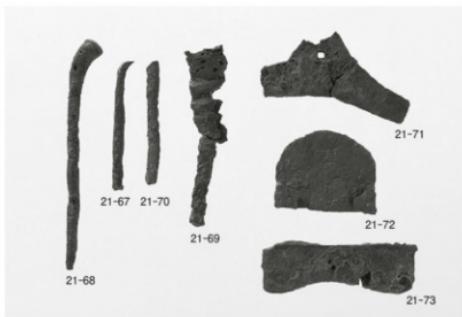
1 古代～中世の瓦（表）

2 古代～中世の瓦（裏）



3 五輪塔空風輪

4 宝篋印塔相輪部



5 金属製品

## 報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第8集

満願寺跡

速源寺急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年2月29日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261(代)

FAX 054-262-4266

印 刷 所 株式会社 三創

静岡県静岡市駿河区中村町166-1

TEL 054-282-4031